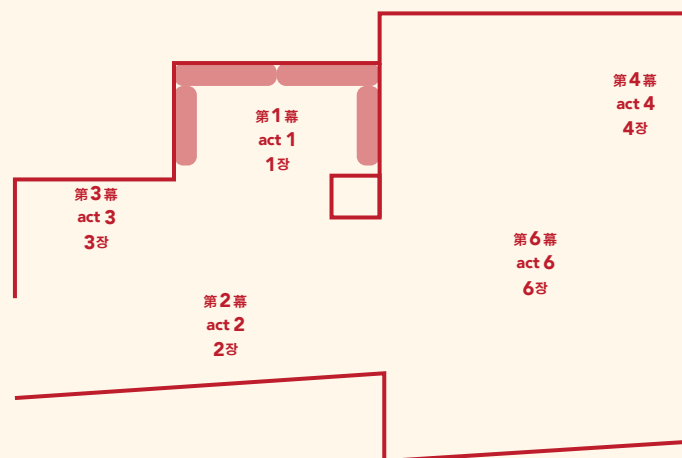


《ボロム(風)》の鑑賞ガイド
 Booklet/playbill for **Borom**
 《보롬》감상 가이드·플레이빌

- 粗面玄武岩
 玄武岩
 Trachybasalt
 Basalt
- 濟州島から日本までの金時鐘の脱出ルート
 Kim Sijong's fugitive route from Jeju to Japan
- 濟州島と日本の間の風向
 Wind movement between Jeju & Japan
- 濟州島と日本との海流
 Ocean currents between Jeju & Japan
- 第1章の濟州島での録音場所
 Recording locations in Jeju for Act 1. The work consists of 6 acts.

MAP

会場マップ



《ボロム（風）》の鑑賞ガイド

お好きな順番で移動しながら聴いたり、読んだり、鑑賞してください。

《ボロム（風）》

マルチメディア・インスタレーション / 企画：ワン・ホンカイ

風は、定義としては空気の動き、力、呼気、におい、暗示、羅針盤、さらに英語では消化器官内のガスを指します。《ボロム（風）》（「ボロム」とは済州島の方言で「風」を意味します）において、風とは済州島で強く感じられる自然と政治の力のみならず、済州島における風景、言葉、音、生活を形づくる物質的かつ霊的な力のことです。

《ボロム（風）》は、在日朝鮮人の詩人、金時鐘による四・三蜂起への参加を出発点とする 1949 年の済州島から日本への逃避行を題材に、風の動きによる曲目を推測によってつくりだします。この曲目は、風と詩人、そして人間、神々、物質、生き物から出来事が多層的に遭遇することで構成されています。急進主義の歴史、神話、風景、地理、欲望、危険、難民、詩など、多種多様な網の目の関係を航行します。目撃する、願う、共謀する、記憶する、忘却する、警告する、感じる、そして聴く—それらの狭間から《ボロム（風）》は、何がさまざまな「連帯感」の手段を構成し / 築いているのか、その「連帯感」（あるいは「親近感」）は、どのように空気、呼吸、ガス、作用の形式によって共有されているのか、を問いかけます。

何と言っても「風」はとらえどころがありません。まるで観衆、楽器、演奏者、設定が変わっていく旅の楽団のように、この作品は風の力学にも似て、次から次へと動いています。これらの曲目は複数の主観から引き出され、済州島から日本の海へと横断する金時鐘の記憶を追っています。金時鐘の軌跡に沿った風に導かれ、《ボロム（風）》は、距離と差異が根本的に接続する別の時空を想像し、探索し、発芽させます。もしかしたら、これらを共におこなう過程で、別の連帯感と場所や時間の結びつき、そして身体が出現するかもしれません。そうすると、そのような風の（としての）歴史は何の意味を持ち、どのように物事を明らかにするのでしょうか。

金時鐘と共に聴く

奈良と台北でのテレビ電話、2020 年 3 月 13 日

ワン・ホンカイによるインタビュー&劉麟玉と姜信子進行

私は済州島で7つ（歳）の時に済州島に来て、小学校を済州市の、今の済州市の中心地のただひとつの正規の六年制の普通学校、後ほど国民学校になりますが、そこを卒業しました。ですから、少年期と思春期のほとんどを済州島で育ったんですね。にもかかわらず、私の、なんていうか、体感的な思いか。正直に申しますと済州島をこの上なく愛していますが、体感的・生理的には好きではありません。

それは、済州島に対する思い出が、良い思い出があまりないからです。これは、私が成人して日本に来て、済州島とかあつ

Borom

ちの国のそのことに関わって勉強した中からそういう理屈も分かってはきましたが、まずは、少年期、濟州島の悪童連、子供達から、濟州島語で「ユキチセキ」と言いますけどね、「陸地の野郎」という風にいじめられました。濟州島は本土から離れていることもあって、生活文化がかなり違いますし、言葉も本土じゃ通じません、濟州島語というのは。そういうことから、濟州島の人たちは本土のことを「陸地」と言うんですよね。陸地と書いて「ユキチ」と言いますが、朝鮮語で。「セキ」というのは畜生を数えるときの匹に当たる言葉ですが、悪い言葉です。お父さんが北朝鮮出身なものでね、余計そう言われましたね。それと、思春期から青春期にかけて四・三事件に遭遇して、四・三事件の残忍、凄惨極まる光景をあまりに目にしましたし、渦の中で這いずり回ったものですから、記憶としては濟州島に対する良い思い出がない。愛しているけど好きではないというのはそういうことになります。

あの、もう少しそこに正確を記せばね、濟州島の人たちが本土の人を言う時は子供に対しては今言った一匹二匹の匹にあたる「セキ」と言いますし、大人、成人には「ユキチノン」と言います。「ノン」というのは「輩」とか「奴」とかいう言葉に相当します。ですから良い言い方をしないんですよ。そこには、そういう言い方の底にある意識はね、流れ者、よそ者、食い詰め者という奇異感覚が強く働いている言葉です。「ユキチノン」と「ユキチセキ」っていうのはね。

で、それとまた相応して本土の人たちは、すべからくと言って良いほど、今韓国の慶尚道とか全羅道とか濟州島に近いところの人たちは、濟州島の人たちを「チェジュノン」と言います。「濟州島の輩」とか「濟州島の奴」という風に見下げます。それは蒙古の統治を 40 年くらい受けてます。ずいぶん長いこと蒙古の勢力圏にありましたんで、だから子供が生まれればソウルに行かし、馬を、畜生を育てようとするれば濟州島にやる、というような言い方で濟州島の人たちを見下げます。これはね、もうちょっと補足させて欲しいんですが、これは、四・三事件の悲劇、本土の人たちが、濟州島の人たちがあれだけ虐殺されても、なんかこう、親近感を寄せなかったことの裏付けにもなる話ですよ。

台湾の歴史とか、本土（中国大陸）との関係でも何かこう通底するものがありやしないかという気もいたします。それで、質問の用紙に戻ります。

濟州島に来た記憶は僕は少年の夏の時で、ちょうど 20 歳の時に濟州島を脱出しましたが、濟州島というと、中空でいつも風が音を上げているものがあります。耳鳴りのように、中空でなんか風が音を上げているようなところが濟州島です。で、その風には、濟州島に来てまず、今はその大きな観光地になってしまってますけど、もっと素朴な時の濟州島というのは、まず「匂い」がしますね。濟州島は風が強いことで有名です。風と火山岩がいっぱいある、女が多いっていうんで、三多島って言います。三つの多い島。風、石、女が三多島っていうのが濟州島の別名です。ですから、濟州島に来てまず感じるのは、風の音であり、それも晴れた日でも、風のない日でも、なんか中空で、中空の芯のところでなんかこう音を上げているものが、やっぱり耳鳴りのように聞こえます。そしてそこには必ず匂いがあり、まといついて、匂いが吹き回っていますね。

風の匂いは、濟州島はまず渚、海辺近くに行くと海の匂い、磯の匂いが強いですね。今はすっかり、済州市の渚だったところは埋め立てられて、陸地になってしまってますけど、私が二十歳すぎまではまだ埋め立てができてなくてね、済州市には、渚には、海女さんたちが主にある浜があり、漁師による浜があって、そして海の匂いもね、また違うんですよ。で、なぜなら、濟州島はね、砂浜じゃなくて砂利浜なの。後ほど王さんが質問した、玄武岩ですか、石ころが波に何千年、波に晒される、波に打たれて転がったので、みんな丸い石が浜辺を埋めてますけどね。だから済州市の浜っていうのは、遠浅、潮が引きますと、遠浅で、済州市内の海辺の人たちは、飲み水は、潮が引いた所に泉がありまして、潮が引いた水を飲みます。すると、やや塩分がありますけど、その匂いが、済州市の浜の匂いが違うんですね。海藻の匂いが強い所とか、小魚の匂いが強い所か、そういう、風が、小さい、こう卵型の小さい島ですけど、地方ごとの匂いがまず違いますね。

濟州島は風が強いこともあって、匂いと同時に、その風には匂いと音が必ずまわりついています。10メートル、20メートル

Borom

ルの風はほとんど風と思わない生活です。向こうではね。少し風が強くなると必ず済州市内は、風が物を切る音、特に電線が、濟州島の人たちはそれを「電信柱が鳴く」と言いますけど、風が電線を切り裂いて、その切り裂かれる音、あのヒュン、ピューンっっ音がまざります。そういう音が出ると、漁師たちが、また農耕する人たちも、作業することに用心をしますね。それと、石垣から隙間風が、また一様に起きます。それも火山岩の石垣ですので、その大小の穴であつたり、小さな穴があるから、その風も隙間風も交響楽のような、たくさん複雑な音が入り混ざります。

それから私はこの匂いと風には四・三事件の惨劇が必ずそこには僕の記憶以上の、自分の生理体験としてまわりついていますね。それは、濟州島の四・三事件が起きてからは、今みたいな夏のあんな風に加えて、人間が腐ってる死臭が空中を舞っていますし、山からの風には、それが吹き下ろしてきますし。それで焼き討ちされた村の焦げ臭い匂いが混ざって、四・三事件当時ずっと濟州島に満ちていました。それが渦を巻いているような、停留しているような風でしたね。ですから風には、匂いと、音と、絡みついているのが私の記憶です。

私はこの風にまつわるもの、風は匂いが伴っているし、音が絡んでる。で、それを、濟州島は卵形の島ですからね、風に関わりなくひねもす（一日中）大小の波が渚を洗っていますね。それを、風に関わりなく渚を洗っている波のことを「ねなみ」と言います。だから濟州島の風を想定する時、強い風ばかりをとにかく思いがちですが、濟州島は、つまり本土からも離れている、孤児の島みたいな島ですから、四六時中渚を洗っているねなみがあります。このねなみを、渚を表しているのも濟州島特有の風なんですよ。静かな風はねなみを洗っています。と同時に私には、濟州島の風と言いますと、まず海からの風、波を立てますと、砂浜ではなく砂利浜ですから、砂利がゴーゴーと鳴ります。波が打ち付ける時、引く時、石ころの塊は、何千年も波で擦られてます、みんな丸いんですが、それみんな玄武岩ですけど。色は、浜を成してる石は長年擦られてるんで白っぽいです。青みかかった白ですけど、なかには黒い石も・・・

その砂利浜が、ゴーゴーと鳴ります。だからこの四・三事件となると、砂利浜を打ち付けるゴーゴーと波が打ち付ける音、その砂利浜の音が、私の耳底に今も生々しい。特に 1948 年 4 月 3 日に濟州島の「人民蜂起」と私たちは言っていますが、蜂起事件が起きますけど、その米軍に支援された軍船引いてましたからね。討伐隊たちが、筆舌に尽くしがたい残忍な、残虐な殺し方をしたんですけど、最後にその濟州島の小さい港の周辺に、大小の倉庫がね、十数個あります。船会社などが積荷を置いたり、次の船に乗せるための荷物を受け継ぐ倉庫がありますけど、四・三事件で皆殺し作戦に入って、問答無用に引っ立てられてくる村ごとの人たちなどは、その倉庫にみんな入れていくんですよ。ですから、次の調達する倉庫がもうないんで、次に引っ立てられてくる一団が来ると、先に入れておいた人たちをどうしたかっていうと、それはね、港の東側に「サラブン」という峰がありますけど、そこに穴を掘ってみんなそこに投げ込んだものですけど。そうすると遺家族たちが、その腐ってウジ湧いているところに駆けつけて行ってね、手掻きで遺族探しをするんで、その残虐さが非難されるようになりますから、海へ搬出して投げ込むんですよ。その海へ投げ込む、水で、海に投げ込んで殺す人たちを運んだのはアメリカ軍の上陸用の舟艇、小型の舟艇でした。

その 4、5 人単位で手首を針金でくぐられてる遺体がね、何体か打ち上がったんですよ。強い風が止むと、その手足をくぐられた農民服のままの帯を取り上げられてますからね、下半身は無いようなもんですけど、砂利浜の砂利が擦れてね、波が来るたびに動いて、ずるずるっと肉も、おから豆腐のおからって知ってるかな？ああ言う状態に肉体になっているんだよね。だからちょっとずれたら白骨化面ですよ。だからその濟州島の風っていうと、私が中学校行くようになってから、海の招きで家移りをしてそこに暮らしましたが、そこにその打ち上げる波と砂利浜の砂利の音とその砂利に擦られて 4、5 人単位でくぐられた遺体がずり落ちる音、肉体も白かったり、そういうのが絡みつく。ですから、私はねなみを寄せるもの、風が静まっても、濟州島にはねなみはいつも起きてる。風が強いと砂利浜を鳴らす。そこに虐殺された遺体が打ち上がった。だから私は濟州島を愛しているけど、好きになれない。

Borom

「濟州島は玄武岩なのか、で私が潜んだクアンタルという岩礁は玄武岩じゃないだろうか」という質問。そう、玄武岩ですが、これはみんな火山によって隆起した岩礁です。で、それも、本当に臭い場合とツルンとした玄武岩です。非常に。高さが大体 30 メートル近くあるんじゃないかなあ。私がそこに潜んだ頃までは、クアンタルというのは海鳥と渡り鳥の集散地、鳥の糞が真っ白くね、雪かぶったようにありましたが、今はそんなこと全然なくなってしまってますね。温暖化でしょうか、それとも・・・はい。玄武岩で、その質問通りであります。で玄武岩には、砂利浜にはね、丸っこい、また平たく丸っこい、色の綺麗な・・・真っ黒い石、それを濟州島語で「モットン」と言いますけど、「モッ」っていうと炭であり、「トン」っていうのは石ですから、黒い石と書いて「モットン」と言います。炭石と書いて。それ私、次の質問「どこから出て、濟州島を脱出したか」という質問がその次にありますけど、実はそれまでね、僕、あの、モットンの平たく丸いやつをね、ずっと懐に持ってたんですよ。それをクアンタルに潜んだ時落としてしまいましたね。僕もそうやってお守りみたいに持ってたことがありました。綺麗な石です。固いです。

濟州島の私がこちらに来るまでにいた浜は砂利浜で、ほとんど玄武岩の砂利ですね。で、私が潜んだった岩礁も、もちろん玄武岩。火山の噴火石ですから、それが岩礁を成してるものですから、玄武岩に違いありません。それは溶岩でなくて、海水から吹き上がった岩礁ですね。

今の濟州空港のね、東はずれに植民地下の時に日本軍の飛行場がありました。それを「チョントウル」と言いますが、チョントウル飛行場という、今の飛行場の東はずれです。だからそれは植民地統治からあった所で、その、チョントウルと言って、集団で、豪掘って、立たして、撃ち殺して埋めた遺体の発掘を改めてしてる所としてよく知られている所です。そのチョントウル飛行場の仕切りの北側の小さい漁村がありますが、それが「タクネ」という村であり、そこに小さい港があり、今も港はあって、飲み水もその港の端から湧いてる。タクネという港から脱出しました。

早くからある小さい村ですけどね、濟州市内に隣接しotta所、村で、そのタクネの漁村でオールナッシング、漁業で暮しているようなあれですけどね。そのタクネっていう小さい港から脱出しました。

それは小さい、木の葉のような漁船です。それで、僕は40キロぐらい先かなと思ったら、文献によると、僕が潜んだ岩礁を「クアンタル」って言いますがね。クアンタルと言われる島だと30キロあまりと出ていましたんで、大体人間の目で、その水平線っていうのは大体50キロとされているのですが、だから30キロあまりの所なんでしょうね。

これは夜でしたからね、泳げたようなもので。青黒い、昼間はとてもじゃない、入りたいと思えるような海じゃありません。うねりが大きいしね。あの、昼間、夜が明けて、海の青黒さには本当に驚きましたね。やはり夜だから泳げたようなもん。2、30メートルですからいけましたね。で、この泳ぎ着いた島をクアンタルと言いますが、ちょうど濟州市内から見ると小さく富士山型に見えます。富士山のような形の岩礁ですけど。海から上がれるような場所じゃありません。切り立った岩が動きを成していましたね。船着き場などももちろんありません。

それと濟州市内から、そのクアンタルの北側、3、40メートル先にある岩礁ですけど、その島を裏側、濟州市から見たら北側に曲がって成したんですね。それと島がちょうど、一枚岩のように見えottaのは、後ろから回ったら、ちょうどねコップを交わしたような岩礁でしたね。そのくると回って、ちょうど回った北側のはずれに裂け目が下までありましてね、噴火した裂け目なんでしょうね。その裂け目に僕は潜むようになりました。

夢を見る、その寝た記憶がほとんど無いですね、4日間。夜明けとなると、そこはちょっと漁場だったようで、討伐隊たちが挑発した漁船が、目の前で漁してるんですよ。漁船に警官が旗持って立ってましてね。だから、潜むことがもう命がすり減るようなものでして、それにクアンタルの風はまたこれきつい風です。峰風、北風、風が舞ってね。ちょうど裂け目のところに、

その何かを裂くような音が飛沫をあげてヒュン、キュンともう、名状し難いような風が夜通し吹き上げますから。まず寒い、それとね、70年が過ぎましたが、あの夜の怖さ、孤絶感というのは、筆舌に尽かし難く、言い表せない。本当に怖くて。ちょうど6月のかがりでしたんで、梅雨の走りでもあって、晴れてるのに星を見る間も、余裕もありませんしね、大体なんか曇っていた感じですね。風が切り裂いて、波しぶきが裂け目を打ち付けていつも濡れてますからね。体が凍える。闇の深さの怖さというのは説明のしようがないね。本当に怖かった。もう自分が虫けら、虫けらでもないんだなあ、それにも劣るような気がするね。なんで息をしているのか、なぜ生きているのかが、ここまでして生きる必要がどこにあるのかと思うね。そのまま手を振って捕まって行ってもらった方がいいかなという風にいつもかられ、また飛び込んで死んでしまいたいいつも思ったね。だからまどろんでも悪夢が続いているようなもので、昼間少し風が止むといつも親へのすまなさであったり、逃げおてる自分の卑劣さへの自己を責める思いばかりだね。とにかく僕は4日間というのがね、40年も50年もottaような気がするんだわ。あの長いこと、1日の長いこと。そんなもんです。

寒くて、震えておりましたから、四六時中齒がガタガタガタ鳴ってましたし、6月に入ったっていうのにそんな寒さで、私、濡れてますんでね、飛沫で。そして風が底を吹き上がっていくんですから。で、その年老いた親まで捨てて、ここまでしてお前命を長らえるということはどういうことかをしょっちゅう自問されましたね。僕は南道党に入党したことで四・三（事件）に関わるわけですけど、本当にお前正真な思いで入党したのか、そればかり自分を責める思いでしたね。だから4日間というのは際限もなく長い時間をして、その間じゅう、生きてること自体がいかにこの苦痛を伴うものか苦しいことかを分かりました。生きてること自体が苦しいことなんだということ骨の髄に沁みたね。本当に飛び込んで終わりたいってずっとそればかり思ったね。だからもうほとんどは自分の死にまつわるものが、その夢現つのようにいつも、自分がどんな死体を晒して浮いているとか、自分が手を上げて、収容されて、引っ立てられて行って、拷問にあって死んでいく様と、そんなことばかりが4日間・・・そういうこと思うことが寒さに耐えられることであったかもしれないね。なんであんなに寒かったんだろうね。

6月初めだったので、生ぬるい風だったはずですが、とにかく凍えるばかり寒かったことと、1日遅れて日本へ脱出する船が寄ってくれたんですけど、ロープを投げてくれたんでね、船にたどり着けたね。そうじゃないと、あの4日間でもう精も根も尽き果ててましたね。それで4日間も岩肌を切る風の音、あの裂け目を突っ切って吹き上がっていく風の音が私を責めたてましたけど、そりゃそのまんま、その岩礁、濟州島の悲鳴そのものであったという風に今記憶しますね。

その潜んだ岩礁で、骨身にしみたものは、風は鈍いうねりの音でもありましたね。だから、風は一直線に吹きわたるものじゃなくて、波のうねりに沿って、鈍く音立てるものでもあったということです。だから濟州島ですっと受けotta風と、また岩礁で聞いた風の音とは（違う）・・・岩礁で聞いた風は、鈍いうねりの音でしたね。

午前の2時すぎごろ、クアンタル、船は東向きで走りましたからね。その濟州島の島影っていうのは、島かげはぼんやり、うっすらこう横たわって見えるくらいのもんで、プクチョルリっていう村が見えたわけではありません。ただはっきり見えるのは濟州島が一番の卵形の島の東の曲がり角にある、イルチュルボン、「日出峰」と書く、これも火山が吹き上がった観光地ですか。その姿は明確に見えましたけどね。プクチョルリは見えません。

私は、濟州島の韓国領域を脱出するまでは船長室後ろの機関室の上に、煙突にベルトを巻いて座ってましたからね。脱出する時の臭いは、知りません。まず、フタをこう、水が入らないように丸ごとかぶせる・・・えっとね、どれくらいかね、6、7センチぐらいますめのフタが、船倉が日本の畳にして半畳ぐらいのやつが3つくらいある船でしたけどね。第一にそのフタを開けただけで人がすし詰めに入る余地なんてありませんでしたし、まずあの、魚を詰めotta、魚ピッチョリ板の木目に染み付いているその魚の臭い、何よりも重油の臭いがね、とても耐えられる臭いじゃなくて、入る余地もありませんでしたしね。

「ナマウン」

それで僕は、船長室の後ろ、機関室の屋根、三角の屋根に、煙突にベルト巻いて座って、韓国領海を脱出しましたね。だから日本の内海に入ってから魚の船倉入りましたが、あれは耐えられない臭いでしたよ。狭い空間の密室、密閉した状態でしたからね。なにしろ畳半畳のところね、10 人近く入っているんだね。膝を抱いて。だから強いて言えば、狭い空間の、密室のこもっている吐息、よどんだ吐息みたいな臭いかな。とてもだから辛抱できる臭いじゃなかったね、私はね。

音は機関室の音、エンジンのポンポンポンポンっていうような音が聞こえるだけでしたね。

日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

この・・・私が乗せてもらった 4 トンくらいの船でしたけどね、それは日本で、日本の漁船だったのを買い取ったんでしょうけどね、そういう商売する人たちが。その乗ってる人たちはもうオールナッシング。日本が戦争に負けて、うちの国が解放されたっていうんで、津波のように 6 万（人）あまりが済州島に帰ってくるんですが、帰ってきた人たちがもう済州島で暮らしていけない。現金収入がないからね。だからもういっぺん出戻って行く人たちが全部でしたね。で、私はクアンタルに潜んだのも、切羽詰まったこともありますけど、密航船には、その四・三事件に関わった人は絶対に乗せないんですね。全部と一緒に殺されるから言うてね。そういうことがあってね、うちの親父お袋は、ありったけのお金に代わるものはありったけたき売ったんでしょけど。僕が命を長らえた分、うちの親は丸裸になったようなものだと思います。

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

日本の内海に入ってきて、レーダーに捕捉されるから皆おし黙るのように言われたんですが。まず明確に違うのは、日本の内海、僕は鹿児島県の先つちよまで船が暴風みたいな雨に流されて、そこから鹿児島県の沖を内海に入って行ったんです。鹿児島県回った途端ね、日本の海の静けさが、ポンポンというエンジンの音を介してもはっきりわかりましたね。静かですよ。それは揺れがとても少なかった、あと日本は今平和なんだなあという変な思いでおりましたね。それと私は聞こえましたかって、それは行き交う船の音に緊張しますし、まず捕まったらね、その僕みたいに、討伐隊に追われている身でない他の人たちはね、密航者としてただ送り返されるだけでしょけど、僕などはもう捕まったらおしまいですから、行き交う船の音というのは非常に緊張しましたね。ある時は、間近に船が通ったことがあって、自分の心臓の音を自分で聞いたような思いをしたことが実際にありますね。

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

日本の内海に入ってから船倉に私も入りましたので。これが植民地統治の複雑な現象でしょうかね。日本が戦争に負けて、恋い焦がれたようにみんな自分の故郷に帰ってきたんですが、もう暮らしていけなくなって戻って行って。植民地統治でも、日本の低賃金労働者として日本で暮らしていた人たちなんですよね。ですから日本での暮らしも相当過酷だったはずなのに、この人たちはこぞって喜ぶんですよ、内海で。まず、死の四・三事件の、あの流血、惨劇の島から抜け出たこともありましょけど、日本に戻ってきたという、生来の自分の在所に帰ってきたような喜びが滲んで、話も弾みますしね。それと正反対に私は、ここまでは命を繋いできた（けど）、東西南北も知らない、縁戚一人知っている人はいない、はて日本に来て、どこでどうして暮らして生きていけんのやろと思ったら、それこそ胸に鉛が詰まったような重苦しい悲しみに打ち沈んでましたね。ただなんとか、うちの同胞の居住者が多い鶴橋、これは環状線と当時は城東線と言われた時代ですか、鶴島(?)なら連れてってあげるよと言ったおっちゃんたちがあって、それが期待でしたけどね。今で言えば舞子の浜だというのが分かってきました。そこに着いた途端、蜘蛛の巣散らすように行っちゃってね。もう全く渚に膝抱えて一人。人間てあんなに涙があるのか、すでに涙枯れてるはずなのにね。膝まで水、海浸かってね。船が向き変えてポンポンって行ってしまったらね、本当に（涙が）溢れたね。どうしていいかわからないんだもんね。立つところ今、どこ行きゃいいのか分からん。大阪がどこにあるかも分からなかったしね。統治というのはむごいよ。

クレメンタインの歌は今でもそのまま歌えますし、何かにおいたら鼻歌まじりに歌いますね。ただ歳がたって喉がかすれてしまってますけどね。

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

韓国の民主化要求闘争、30 年近く続きましたが、韓国の民主化要求闘争の契機は、日本との日韓条約が結ばれることに反

Borom

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

対したことが、民主化要求闘争の始めを成しますが、その民主化要求闘争の最中で歌われていた歌が好きです。例えばよく知られているのに「アチミス」っていう「朝露」という歌がありますけど、その類の歌が好きです。それとうち国の歌曲というのが、これは驚きでしたけどね、うちの国にこんな文化があるなんて思っていなかったのですね。戦後歌謡なんて初めて聴いた「ネマウン」っていう我が心という歌を歌った、プロのソプラノ歌手の女性がおりましたが、あの歌にはほんまに全身が溶けてしまうような、洗われたような思いにかられましたね。だからうちの国の歌曲が好きですし、それはもう戦後知った歌ですけどね。今も口ずさむのは民主化要求闘争の中で歌われた歌が好きです。後ここには歌に絡んだ話をちょっとしませう。

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

「ネマウン」、「マウン」って言ったら心、「ネ」って言ったら私、で「我が心」っていう意味ですね。詩人の詩ですけど、それを昨日探そうと思ったら探せなくて、分かったらいつか差し上げましょう。良い歌詞です。「私の心は湖です。どうぞ艀を漕いで来てください。私はあなたの船の舳先で玉と散りましょう」というのが大体一番の歌詞ですけど。

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

今日は喉があまり優れないので。今日はダメだったらもっぺん録り直して・・・

密航船で日本に帰国した時、船長室で乗客と話す。

僕、歌には、詩を書く者として、歌はいつも警戒するものです。なぜなら一般に歌われる歌っていうのは非常に罪深いですよね。私は戸籍通りだと、旧暦で戸籍ができてますんで、1928 年 12 月 8 日生まれです。ですから日本帝国主義の植民地統治がほとんどもう制度的にも生活的にも行き渡った時に生まれました。私にはその日本帝国主義の物理的な仕打ちを受けたわけではありません。私にやってきた（日本の植民地）のは日本の優しい歌としてやってきたんです。今でもよく歌いますよ。日本の叙情歌と言われるもの、唱歌と言われるもの、ほとんど知らない歌はないくらい、僕はよく知っています。よく歌ったものです。ですから、よく広く子供たちが歌っている、夕焼け小焼けという歌は、それ一つにしてもね、あの歌の歌詞に見合う風景がうちの国には無いですよね。農村に行っても、風吹けば飛んでしまうような薄いかさぶたみみたいな菓屋根で、もう決まりきって門はみな傾いていますしね。そこでその夕焼け小焼けみたいな美しい歌に出会いますと、そこへ日本の鎮守の森をかぶせて歌ったものです。だから早くうちの国もこんな美しい歌の国にならねばならん。つまり早く日本人にならねばならんという風にいつも自分を励ましたもんですよ。ですから罪深いです。で、昨今、昭和を褒める歌が、昭和は輝いていたとか言うてね、日本の叙情歌がたくさん、今日本のメディアで、特にテレビでもかなりの時間をとってなんと美しい歌だろうとずっと紹介してますけどね。非常に僕は、日本の国家的、社会的、政治的状况に不安をいんでいます。歌というものはね、その皮膚を培いません。情感の共感を広げます。歌に馴染むと、その歌がなんか記憶が、他は忘れても歌はなかなか忘れないもので、その歌を歌い出すとね、その歌が歌われた時代が一番良い時代だったように思い込む、そう思っちゃいますね。日本でも戦後だって食糧難で大変だったんだから。でもあの当時の歌を聴くと、すっかり絆（ほだ）されて、あの時は良かったなと思っちゃうんですよ。ですから歌は皮膚を持たないから、詩を書く者として、とても警戒しますね。私流に言うと、歌が罪深いというのは、日本の小学唱歌に見るような有名な童謡、わらべうたっていうのは大正末期、つまり1930 年代初頭が一番盛んになっていきます。満州事変と言われる満州侵攻が日本のその後の太平洋戦争、15 年戦争の始まりでしたが、あの時期日本では、童謡運動が起きましてね、日本の詩人はみんな童謡を書くようになります。ほとんど今も残ってましてね、今も歌われますね。なぜ罪深いかというとね、日本の兵隊たちにも、継戦の間には故郷の妻や子供を思ってそんな歌を歌ったんですね。僕もそのような兵隊たくさん知ってますけど、年齢的には。そんな美しい歌を歌いながら、自分の身内や故郷を偲びますけど、その歌を歌いながら、「三光作戦」と言われる殺し尽くし焼き尽くし奪い尽くすような人間にあるまじきことをやったことに対して痛さが全然無いですよ。その歌を歌いながら、それだけのことがやれるんですよ。それで日本の歌を美しいと言うんだよね。だから叙情歌と言われるもの、唱歌というか、歌の数からすると世界的に見てもトップクラスの歌の量でしょう。つまり、そういう歌を歌いながら、故郷は偲べても、身内は偲べても、自分らが卑劣なことをやることについての痛みは一つも感じなかったのが日本の叙情歌と言われる歌なんだね。私は今もその歌を歌いますよ。私が歌うのは、その歌を歌えない人を殺したことを反芻することがありますし、まずはそれだけの美しい歌が美しい歌であるためには、その歌が汚されるようなことをしてはならないということをやらないといけないわな。特に歌は、時と場所によって歌の生命を別にします。今沖縄では辺野古の基地に反対でね、島のお年寄りたちが 3000 数日も座り込みをやってますよね。あ

Borom

の人たちが「赤とんぼ」を歌うっていう時、または「故郷」を歌う時、歌の命が別なんですよ。だから歌は皮膚を持たない。情感を共感することですぐ一緒になってしまう。特に日本人みたいな国民性はね、一つに群れることに長けていますから、本当に歌の力は大きいです。私が師匠と勝手に思っている先生の言葉にね、「歌なくして復興庁は始まらない」という談笑がありますけど、まさに歌はそういう役割を今持ってやっていますね。ですから私は詩を書く者として、歌を大事にする、その歌の良さを保ち続けることをやる人たちが歌う歌が美しいんであって、良い歌だから歌っているって言って、憲法 9 条をなくすことになんとも思わない。賛同したり、延々と安倍首相は人気が高かったりね。そういう人たちの多くが日本の抒情的な歌を好みます。だから歌に対してはいつも警戒をしております。以上ですね。

金時鐘

* 金時鐘
1929年(旧暦1928年12月)朝鮮釜山に生まれ、元山市の祖父のもとに一時預けられる。済州島で育つ。48年の「済州島四・三事件」に関わり来日。50年頃から日本語で詩作を始める。在日朝鮮人団体の文化関係の活動に携わるが、運動の路線転換以降、組織批判を受け、組織運動から離れる。兵庫県立湊川高等学校教員(1973-92年)。大阪文学学校特別アドバイザー。詩人。主な作品として、詩集に『地平線』(ギンダレ発行所、1955)『日本風土記』(国文社、1957)長篇詩集『新潟』(構造社、1970)『原野の詩——集成詩集』(立風書房、1991)『化石の夏——金時鐘詩集』(海風社、1998)『金時鐘詩集選 境界の詩——猪飼野詩集／光州詩片』(藤原書店、2005)『四時詩集 失くした季節』(藤原書店、2010、第41回高見順賞)他。評論集に『さらされるものと さらすものと』(明治図書出版、1975)『クレメンタインの歌』(文和書房、1980)『「在日」のはざまで』(立風書房、1986、第40回毎日出版文化賞。平凡社ライブラリー、2001)他。エッセーに『草むらの時——小文集』(海風社、1997)『わが生と詩』(岩波書店、2004)『朝鮮と日本に生きる』(岩波書店、2015、大佛次郎賞)他多数。(作家略歴は藤原書店のウェブサイトから抜粋。)

金時鐘

第1幕：風

風の録音は以下の場所から集められた

- 알뜨르 비행장 : 제주특별자치도 서귀포시 대정읍 상모리 1629-8 The Altteuleu airfield: 1629-8, Sangmo-ri, Daejeong-eup, Seogwipo-si, Jeju-do

- 천주교 신창성당 용수공소 : 제주특별자치도 제주시 한경면 용수길 149-9 Catholic Church Sinchang Cathedral Yongsu station: 149-9, Yongsu-gil, Hangeyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do

- 성굴 (도구리할망 굴) : 제주특별자치도 제주시 한경면 성굴로 Seonggul (Doguri Halmang Gul): Seonggul-ro, Hangeyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do

- 도두 알작지 (도두항) : 제주특별자치도 제주시 도두항길22-2 Dodu Aljakji beach (Dodu Port): 22-2, Doduhang-gil, Jeju-si, Jeju-do

- 당산봉 (생이기정- 새의절벽) : 제주특별자치도 제주시 한경면 용수리 산59 Dangsanbong (Saengi-gijeong = Bird's cliff): 59 Yongsu-ri, Hangeyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do, South Korea

- 수월봉 (용암지층, 태풍) : 제주시 한경면 Suwolbong (Lava strata, Typhoon): Hangeyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do

- 제주시 공설공원 묘지 : 제주특별자치도 제주시 연동

Borom

Jeju City Public Park Cemetery: Yeon-dong, Jeju-si, Jeju-do

- 제주 관음사 세불선원 : 제주특별자치도 제주시 산록북로 690-1 Jeju Gwaneumsa Sebul Zen temple: 690-1, Sallokbuk-ro, Jeju-si, Jeju-do

- 상가리 귤 과수원 (새, 바람) : 제주특별자치도 제주시 애월읍 상가북2길 19 Sangga-ri Tangerine orchard (Bird, Wind): 19, Sanggabuk2-gil, Aewol-eup, Jeju-si, Jeju-do

- 4.3학살터 (사라진 마을) : 제주특별자치도 서귀포시 안덕면 동광리 233 4.3 Slaughter ground (Lost town): 233, Donggwang-ri, Andeok-myeon, Seogwipo-si, Jeju-do

- 사라봉 (영등굿) : 제주특별자치도 제주시 건입동 사라봉동길 74 Sarabong (Yeongdeung-gut): 74, Sarabongdong-gil, Jeju-si, Jeju-do

- 우도Geommeolle 해변 - 경안동굴 (해안동굴) : 제주특별자치도 제주시 우도면 우도해안길 Udo Geommeolle Beach - Gyeongan Cave (Coastal cave): Udohaean-gil, Udo-myeon, Jeju-si, Jeju-do

- 교래자연휴양림 (꽃자왈) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 남조로 2023 Gyorae Natural Recreation Forest (Gotjawal Forest): 2023, Namjo-ro, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do

- 용담 다끄네포구 : 제주특별자치도 제주시 용담2동 1092-7 Yongdam Daggeune Port: 1092-7 Yongdam 2-dong, Jeju-si, Jeju-do

- 하도 - 종달 올레길 (돌담, 바람) : 제주특별자치도 제주시 구좌읍 해녀박물관길 26 Hado – Jongdal Olle Trail (Stone wall, Wind): 26, Haenyebangmulgwan-gil, Gujwa-eup, Jeju-si, Jeju-do

- 하도 (철새도래지) : 제주특별자치도 제주시 구좌읍 하도리 53-2 Hado (Habitat for Migrant Birds): 53-2, Hado-ri, Gujwa-eup, Jeju-si, Jeju-do

- 하예포구 (밤바다) : 제주특별자치도 서귀포시 하예동 1729-1 Haye Port (Night sea): 1729-1, Haye-dong, Seogwipo-si, Jeju-do

- 함덕해수욕장 (마을) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 신북로 Hamdeok Beach (village): Sinbuk-ro, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do

- 북촌포구 (4.3학살터) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 북촌9길 26-1 Bukchon Port (4.3 Slaughter ground): 26-1, Bukchon 9-gil, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do

- 관탈섬 (곽계) : 제주 북 27km (좌표 : 동해 33° 43'50.8"N 126° 21'22.6"E) Guantal Island (Gwagge): 27 kilometers north of Jeju City (coordinate point: east sea 33°43'50.8"N 126°21'22.6"E)

- 관탈섬 (곶) : 제주 북 27km (좌표 : 동해 33° 43'50.8"N 126° 21'22.6"E) Guantal Island (Gwagge): 27 kilometers north of Jeju City (coordinate point: east sea 33°43'50.8"N 126°21'22.6"E)

- 관탈섬 (곶) : 제주 북 27km (좌표 : 동해 33° 43'50.8"N 126° 21'22.6"E) Guantal Island (Gwagge): 27 kilometers north of Jeju City (coordinate point: east sea 33°43'50.8"N 126°21'22.6"E)

第2幕：玄武岩石

玄武岩は、溶岩の急速な冷却によって形成された濃い色の、きめの細かい火成岩である。多くの場合、気泡によって残された穴が含まれている。

***表紙裏の済州島の地図をご参照ください。**

Borom

第3幕：ワルダ（レストランの名前）の葉書

朗読：カリッド・アダ

希望の学校、2020年3月9日

「私はこの街で暮らすパレスチナ難民です。そのためここで外国人として経験するあなたの困難を理解できます。やがてイエメンで戦争が終わり、世界中の難民たちを歓迎する繁栄した国となることを願っています。

そして全ての国家が難民に扉を開き、世界中で戦争が終わることを願います。」- シャディ

希望の学校、2020年3月9日

第4幕：ヨンドウン・ハルマン

オ・ヨンブ（シャーマン/霊能者）によるヨンドウン・ハルマン（風の女神）のための別れの儀式
グァンチギ浜辺、2020年3月9日

希望の学校、2020年3月9日

第5幕：歌

これは「希望の学校」のメンバーである韓国在住のイエメン人から提供されたプレイリストである。「希望の学校」は、島の住民と韓国に近年逃れてきたイエメン人の間を取り持つ支援組織として済州島に設立された。

希望の学校、2020年3月9日

1.Chanyeol (EXO) & Punch - Stay With Me

2.LYn - The Legend of the Blue Sea

3.Younha - I Believe

4.Adham Nabulsi - Hada Ma Byentasa

5.Rahma Riad - Mako Menni

6.Aseel Hameem - Enta Al Saadah

7.Faia Younan - Ohebbou Yadayka

8.XXXTENTACION - changes

9.Adele - Someone Like You

10.Rihanna - Love The Way You Lie

11.Abeer Nehme - Waynak

12.Ramy Gamal - Sa'af

13.Rihanna - Diamonds

14.Qomery Molatham - Hadeel

15.Best Songs Of Justin Bieber - Justin Bieber Greatest Hits Cover 2017

16.Clean Bandit - Rockabye

Borom

第6幕：愛しのクレメンタイン

ファン・グムニョ（済州語のインタビュー）:

済州島の風景、2020年3月9日

済州島は素敵なおおらかな街だった。人と会えば、互いにご飯を食べたかと尋ね合うものだった。人々の心に深い寛容さがあった。それがすべて四・三事件で変わってしまった。その悲惨な衝撃でみな黙り込んでしまった。

済州島の風景、2020年3月9日

済州島は海にそびえたっているため、風を遮るものがない。三十を越える、すべて使いこなせないほどの数の名前が風に与えられている。私は子供の頃、凧あげをした思い出がある。男の子が凧あげをしているのを女の子が追った。

済州島の風景、2020年3月9日

子供の頃、済州の空気はつねに海の香りがした。海の香りで濃厚な空気は、いつも湿っていた。済州の風は特別で、春にはヨモギ、夏には草、秋には野菊、冬には暖かい風、季節ごとに違う匂いがした。

済州島の風景、2020年3月9日

済州の石は火山活動によってつくられた。玄武岩で出来ていて、水をよく吸収する。なので、済州島では稲作よりも畑作の方が多い。石の壁が自然の光景のなかに混じり合う景観は、すばらしい財産である。先人たちは、この岩壁にできた穴を、呼吸する穴と呼んだ。

済州島の風景、2020年3月9日

隣で犠牲の儀式があった日、美味しそうな食事の匂いが漂ってきたので、私は石壁の穴に顔を付け、匂いを嗅ぎ、食事が準備される様子を見ていた。その穴から隣人の家族が出入りするのを見ていた。若い男女が壁の穴からこっそりお互いを見つめ合い、恋に落ちてやがて結婚することもあったという。

済州島の風景、2020年3月9日

済州島の風景、2020年3月9日

風について語るとき、わが町にはいろいろな風がある

海のまんなかに立つ島だからだ

あらゆる方角から来る風を遮るものがない

風は漢拏山（ハルラサン）の周りで渦巻いている

済州島の風景、2020年3月9日

30を越える風の名前がある

風の多いところでどう暮らすのか

うだるような暑さの太陽、石に打ちつける風、そして季節ごとに山にかかる雲に合わせて生活している

済州島の風景、2020年3月9日

まず、風が吹く方角から始めよう

四つの風は、セッポロム、ハニボロム、マポロム、ノッポロム

セッポロムは東風、ハニボロムは北風、マポロムは南風、ノッポロムは北西風

済州島の風景、2020年3月9日

済州島の風景、2020年3月9日

ソ・スンシル（シャーマン/霊能者）、抜粋:

済州島の風景、2020年3月9日

ヨンドウン・ハルマンが済州島にくるときはみな注意深くなる。その間、済州島民は雑草取りや畑に肥料をやらなかった。その期間は静かに過ごし、ヨンドウン・ハルマンが去ると働き出し、暖かい風が吹き出す。

済州島の風景、2020年3月9日

金時鐘は、済州島が抱える痛みを伝える役割を果たしてきた。私はテレビであなたの顔を見て、ようやく対馬で会うことができた。あなたが健康でいてくれるのを見て嬉しくてほっとしました。済州島への関心を持ち続けてくれて感謝しています。

歌と演奏：金時鐘、ジョン・シンジ

広い海辺に
 苔屋ひとつ、
 漁師の父と年端もいかぬ娘がいた。
 おお愛よ、愛よ、わが愛しのクレメンタインよ、
 老いた父ひとりしておまえは本当に去ったのか。

ところ

作詞：金東鳴 作曲：金東振
 翻訳：金素雲

わたしのところは湖水です
 どうぞ漕いでお出でなさい
 あなたの白い影を抱き
 玉と砕けて
 舟べりへ 散りませう

わたしのところは燈火です
 あの扉を閉めてください
 あなたの綾衣の裾にふるへて
 ところ静かに
 燃えつきてあげませう

わたしのところは旅人です
 あなたは笛をお吹きなさい
 月の下に耳傾げて
 ところ愉しく
 夜を明かしませう

わたしのところは落葉です
 しばし お庭にとどめてください
 やがて風吹けば さすらい人
 またもや
 あなたを離れませう

朝露

作詞・作曲：金民基

長い夜を明かし草葉に宿る
 真珠より美しい朝露のように
 心に悲しみが実るとき
 朝の丘に登り微笑を学ぶ

太陽は墓地の上に赤く昇り
 真昼の暑さは私の試練か
 私は行く荒れ果てた荒野に
 悲しみ振り捨て私は行く

心に悲しみが実るとき
 朝の丘に登り微笑を学ぶ

太陽は墓地の上に赤く昇り
 真昼の暑さは私の試練か
 私は行く荒れ果てた荒野に
 悲しみ振り捨て私は行く

特別インタビュー & 声出演

金時鐘 (ワン・ホンカイによるインタビュー、姜信子&劉麟玉進行)

録音, デザイン & ミキシング

ガン・ギョンドク (LAMP Studio)

制作コーディネーター

権祥海

出演

ファン・グムニョ, ジョン・シンジ, カリッド・アダ, ソ・スンシル
 ヨンドゥン・グッ (儀式)
 オ・ヨンブ

第5幕ブレイリスト

希望の学校メンバー

翻訳

キム・ファヨン (韓国語 - 英語)、権祥海 (日本語 - 韓国語)、
 ポーラ・ファラン (アラブ語 - 英語)、詹慕如 (日本語 - 中国語)、
 住友文彦、五十嵐純 (英語 - 日本語)

金時鐘インタビューの文字起こし

千葉花子

校正

キム・ファヨン, 権祥海, 住友文彦

リサーチ・アシスタント

鄭曉麗

冊子編集

権祥海

デザイン

寺澤由樹

謝辞

ベク・ガユン, ビル・ディーツ, エミリー・ワン, ハン・ジンオ,
 ホン・イジ, 希望の学校, ホー・ツーニエン, ガン・シンジャ,
 管啓次郎, キム・インソン, キム・ソンネ, ゴ・ワンスン, イ・ドヒ,
 イ・ジュンハ, 劉麟玉, 柯念璞, パク・ウンヘ, ワルダ・レストラン,
 陳澧如, ヨン・スミ

制作委託

アーツ前橋「聴く-共鳴する世界」展
 (2020年12月12日 - 2021年3月21日)

助成

財団法人國家文化芸術基金會、濟州ビエンナーレ

協力

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科

Booklet/playbill for **Borom**

Listen, read, watch, and move through the acts in any order as you may desire.

Borom 2020

Multimedia installation / Conceived by Hong-Kai Wang

By definition, the wind is a movement of air, a force, a breath, a scent, an intimation, a point of the compass, or gas generated in the body. In the project Borom (“borom” stands for “wind” in Jeju dialect), “wind” can refer not only to both strongly felt natural & political forces on Jeju Island, but also to the corporeal and spiritual power that shapes the ways that Jeju looks, speaks, sounds, and lives.

Borom takes the Korean-Japanese poet Kim Sijong’ s fugitive journey from Jeju to Japan in 1949, following his participation in the Jeju 4.3 Uprising as its point of departure, seeking to create a speculative repertoire of the wind’ s movements. This repertoire comprises multimodal encounters between winds, Kim, and other subjects ranging from humans, deities, substances, beings to things. It navigates various webs of relations, such as radical histories, mythologies, landscapes, geology, desires, dangers, refuge, poetry, etc. Between witnessing, dreaming, conspiring, remembering, forgetting, warning, feeling, and listening, Borom asks: what constitutes and constructs various modes of “togetherness?” How is such “togetherness” (or "kinship") being distributed and moved, in the form of air, breath, gas, and agency?

“Wind,” by all means, is amorphous. As such, the form of this work is akin to the dynamics of the wind, moving from one form to another, like a travelling concert that morphs itself with the changing audience, instruments, performers, settings, and so on. The repertoire pulls from multiple subjectivities and follows Kim Sijong’ s memories, traversing from Jeju’ s lands and waters to Japan. Guided by the winds along Kim’ s trajectory, Borom tries to imagine, probe, and germinate other time-spaces where distance and difference can radically connect. Perhaps, in the process of doing this together, other modes of togetherness and networked places, times, and bodies might emerge. And if so, what might such a history as / of the wind mean, and how could it articulate itself?

Listening with Kim Sijong **Between Nara and Taipei over skype, March 13, 2020**

An interview conducted by Hong-Kai Wang & facilitated by Liou Lin-Yu and Kang Shinja (Kyo Nobuko)

I moved to Jeju Island when I was seven years old, and I graduated from the only formal six-year public school in the center of Jeju City, which later became an elementary school. So this means I spent most of my childhood and adolescence growing up in Jeju Island. And yet it’ s my feeling that to be completely honest, I love Jeju Island more than anything, but I'm not too fond of the place physically or physiologically.

That is because I don't have many good memories of Jeju Island. Throughout my childhood, I was bullied and called a “yukji seki” which translates to an “offspring from the land,” in the Jeju dialect by other children throughout my childhood. Since Jeju Island is far from the mainland, its lifestyle and culture are quite different, and the Jeju dialect doesn't work on the mainland. So

consequently, Jeju Islanders refer to mainland Korea as “the land.” The word is written as 陸地 , and spoken as “yuk-ji” in Korean. “Yukji seki” is a word that’s used when counting animals... It’s a demeaning word. Jeju Islanders called me yukji seki because my father was from North Korea. After arriving in Japan as an adult and learning about Jeju and other countries and becoming involved in the Island’s affairs, I came to understand this. Then, from adolescence to early adulthood, I encountered the Jeju Uprising and saw so many brutal and gruesome scenes of April 3, and they continue to crawl around in the whirlpool of my memories; so no, I do not have good memories of Jeju Island. This is what it means to love a place but not like it.

If I can be more precise, when people in Jeju refer to people from the mainland, they use the word "seki," (a collective noun for animals) for children, and "yukji nom" for adults. "Nom" is equivalent to terms like "gangsters" or "servants." They don't use nice expressions. The consciousness at the bottom of these phrases suggests a deep sense of strangeness, something you might feel for the drifter, stranger, and ravenous. "Yukji nom" and "yukji seki" are words used to make you feel strange.

And it's just as natural for people from the mainland to call people from the island "Jeju nom," even those from Gyeongsang and Jeolla provinces, which are not geographically all that far from Jeju Island. They use the same derogatory terms like "gangsters" or "servants" from Jeju. Mainland Korea was under Mongolian rule for 40 or so years, which was quite a long time. From that period comes a saying—” When a child is born, you send the kid to Seoul, and when you want to raise a horse or a beast, you send it to Jeju Island”—words meant to degrade and look down on the Jeju Islander. If I were to add a little more, the April 3 uprising’ s real tragedy was that people from the mainland could not feel empathy for Jeju Islanders even after they were massacred, and this story proves why.

I wonder if there is something in common with Taiwan's history and its relationship to the mainland (Mainland China).

I remember coming to Jeju Island when I was a boy in the summer, and I escaped Jeju Island when I had just turned twenty years old, and in Jeju, you could hear the sound of the wind in mid-air. The sound of its wind wraps and rings in your ears. Even though Jeju Island has become a big tourist destination, Jeju’ s wind during a simpler time carried a “smell.” Jeju Island is famous for its strong wind. It is also called “Samdado” because it is rich in wind, volcanic rocks, and women. An island of three abundances. Samdado is Jeju Island’ s nickname for its abundance in winds, rocks, and women. So what I experience first when I am in Jeju is the wind’ s sound, and even on days that are clear and winds are calm, you can hear deep vibrating sounds in the air. And there is always the smell, and it clings to the wind and swirls around.

Jeju Island smells strongly of the sea when you go near the beach. Today, all the Jeju City shores have been filled and turned into land, but the reclamation process had not started when I was twenty years old. In Jeju City, there were beaches mainly for haenyeos (women sea divers), and then there were beaches made by the fishermen. The sea smells different because, in Jeju Island, we have gravel, not sandy beaches. Ms. Wang asked about the basalt earlier? Because rocks had been swept up, beaten, and rolled against the waves for thousands of years, the beaches are now filled with those round stones. Whenever the ebb tide falls on the shores of Jeju City, people in town go and drink the water because there is a spring where the wave is gone. This water contains a bit of salt, but its smell is different from that of a Jeju beach. Jeju’ s smell is quite different from the rest of the country; it is a small, egg-shaped island with a strong scent of seaweed and small fishes.

Jeju Island can have strong winds, so the wind is inextricably bound with its smell and sound. In Jeju, winds at a speed of 10, 20 meters (per second) are hardly considered real winds. Over there, whenever the winds get a bit strong, you can hear the sound of the wind cutting through Jeju City, especially the electric wires, and people say, "the telephone poles are howling," as the winds rip through the power lines, you can hear the hyoong, pyoong sounds they make. When you hear this sound, fishers and farmers become cautious about working. And there are always winds passing through the cracks of the stone walls. Since the stone walls consist of volcanic rocks and contain king-sized and small holes, many complicated sounds emerge together from the winds like a symphony.

And in this wind and smell, the tragedy of Jeju Uprising clings to my physiological experience and haunts me beyond my memory. The summer after the April 3 uprising, a warm breeze carried the odor of rotting human carcasses floating in the air, and the

Borom

wind blew down from the mountain. And the burning smell of villages on fire—all these odors mixed and overwhelmed Jeju in the uprising's aftermath. The wind carried these smells like a vortex and stayed. So that's why my memory of the wind is entangled with the smell and the sound.

Jeju's winds have always inspired me, including the way they accompany smells and intertwine with sound. Jeju is the shape of an egg, so big and small waves sweep its shores all day regardless of the wind. We call those small, constant ripples “Nenami.” It's easy to think of only strong winds when talking about Jeju Island, but Jeju is like an orphan separated at birth from the mainland, and nenami washes away the shores all day long. Nenami, along with the beach, are part of Jeju's unique “windscape.” “Nenami” is what we call small waves that come and wash the beach away without any winds. The calm winds sweep across the ripples. At the same time, I think first of the wind from the sea when I think about the winds of Jeju Island, and as the waves break against the gravel, not sandy, beaches of Jeju, the gravel makes go-go sounds. The lumps of stones have slowly washed away as waves have pulled and smashed against them for thousands of years. All these rocks are round basalts. The stones at the beach tend to be white because water has washed over them for a long time. It's more of a blueish white, and there are also black stones among them.

The gravel beach was rumbling. Even today, when I think of the Jeju Uprising, I vividly hear the sounds of waves beating against the gravel beach and rocks, making a go-go sound. Especially on April 3, 1948, we called it the “People's Uprising” in Jeju Island, but after the uprising took place, the opposition brought in a warship supported by the U.S. military. The punitive forces used brutal, murderous methods too painful to describe in words, and towards the end, there were a dozen large and small warehouses around the small ports of Jeju Island. They were warehouses where shipping companies stored and transferred cargo. Still, during the uprising, a massacre started, and villagers across the island were taken into custody at random and locked in those warehouses. And because there wasn't additional storage, when the next round of villagers arrived, the last group was taken and dumped at the foot of a hill called Sarabong on the port’ s eastern side. The prisoners were then transported and thrown into the sea since the army did not want to risk surviving families digging the maggot-infested grounds and finding the bodies of the deceased—they knew they'd be condemned for the atrocity. It was an American landing craft, a small ship that transported people to the sea to kill them.

Some of the dead bodies floated up in the sea, in units of four and five wired together by their wrists. Once the strong gusts passed, waistbands from the villager's worn-out clothes appeared. It was as if these bodies didn't have lower bodies, they had been swept up and beaten against the gravel on the beach, and their flesh was the texture of biji, do you know what it is? It's the leftover pulp from making tofu, and that's how these bodies were. Only their skeletons would have remained if they were swept up and beaten by the waves a little more. So when I think of Jeju's winds, I remember moving to a house by the sea when I was in middle school. I remember hearing the sounds of waves breaking on the beach, the gravel beating together, and the wired corpses being scraped in and out against the gravel beach, their bodies intertwined with something white. Even when the wind is still, there is always a ripple in Jeju Island. When the wind gusts, the gravel starts making sounds. And that's where the massacred corpses floated. So this is why I love Jeju, but I don't like it.

Does Jeju Island consist of basalt? If so, was Guantal, a small island I was hiding in, also made of basalt?" Yes, they are all basalts, and various rocks and reefs of Jeju are the results of volcanic activities. The basalts of Guantal Island were exceptionally smooth and stinky. Very much so. I think they are about 30 meters tall. By the time I hid there, Guantal was a gathering place for sea and migratory birds, and it was completely covered in bird droppings, white like a fresh scattering of snow, but now everything has changed. Is it global warming...yes. It consists of basalt, just like the question asked. On basalt islands, the gravel stones on the beach are round, flat, and beautiful in color... pitch black stones, in Jeju dialect we call them "mukdol (먹돌)," where “muk” means charcoal and “dol” means rock, so we refer to them as black stone (墨石) in writing and as mukdol in speech. Written as 墨石 . You know, I had kept this flat, round mukdol in my pocket. I accidentally dropped it in Guantal while I was in hiding. I used to hold onto it like a charm. It's a pretty stone. And firm.

The beach I used to visit on Jeju was a gravel beach consisting of basalt rocks. So, of course, basalt is where I went to hide. It must be basalt because it originated from the same volcanic eruption. It's not lava but a reef that has risen above the sea.

Borom

There was an airfield for the Japanese army during the colonial era where Jeju International Airport is currently located. It was called "Jeongtteureu (정뜨르)" airfield and took up what is today the east side of the airport. It's a place that's been around since colonial rule, and it is well known now for its excavation of dead bodies that had been lined up, beaten, shot to death, and buried on the airfield's grounds. There was a small fishing village north of the Jeongtteureu airfield called "Dakkeune (다끄네)," where a small harbor still sits, and you can find freshwater springs along the port's edges. I escaped from the harbor in Dakkeune.

Dakkeune was a small fishing village near Jeju City, and it had somehow managed to maintain a quiet, ordinary life. I escaped from that small harbor in Dakkeune.

It was a small, leaf-like fishing boat. I thought I was about 40 kilometers away, but according to documents, the island I was hiding on is named Guantal. It records that Guantal is about 30 kilometers (from Jeju), people say the horizon appears roughly 50 kilometers away to the naked eye, so anyhow, Guantal is probably about 30 kilometers away.

I was only able to swim because it was night. During the day, the dark blue water was not the kind of ocean you would want to go into. The waves were rough. I remember being surprised by the dark blue of the sea once the day cleared and night came. I could only swim because it was at night, and it was only 20-30 meters away. I swam to an island I later learned was Guantal; from Jeju City, it looks like a small Mount Fuji, which makes sense since they are both made of basalt. Guantal wasn't a place that you could just reach and climb up to from the sea. Rocks were bouncing up and down in the thick mist. And no docks were to be found, of course.

Guantal was a reef about 30, 40 kilometers north of downtown Jeju, and its shape bent inwards—from Jeju City, it looked like the rock was curbing north—in a way that made me feel hidden. On its one side, the island appeared as a monolith, but it looked like cups when you approached the island from behind. There was a crack that ran deep down on the northern edge of the island. It probably cracked during an eruption? I began hiding in this crevice.

To dream, I hardly have memories of sleeping in my four days there. At dawn, the place turned into a fishing ground, and fishing boats (that seemed to be) provoked by the punitive forces were fishing right in front of my eyes. A police officer would be standing there with a flag on those fishing boats. So hiding was like shaving years off your life, and also, the winds were so formidable. Strong cold winds rushed in from the north. The hyoong, kyoong sounds would break through the crack and sprayed swirls of the sea into where I was hiding; it is difficult to describe how persistently the wind blew through the night. Most of all, it was so cold, and it has already been 70 years, but the fear and loneliness I felt on those nights are hard to express in words. It was terrifying. It was just around June, during the rainy season, and even on clear nights, I didn't feel comfortable enough to look up and enjoy the stars. I felt as though it was always cloudy. I was still wet from winds blowing and waves splashing against the crack. I was freezing. The depth of fear and darkness I was feeling is hard to explain. It was horrifying. Am I a bug? No, I wasn't a bug. I was less than one. I wondered, why was I breathing? Why am I alive? Why do I need to live and continue like this? I often thought I would be better off if I just waved my hands and got taken in, and I wanted just as much to jump off the island and die. So whenever sleep came, it happened as nightmares, and when the wind stopped a little during the day, I felt sorry for my parents or blamed myself for making this despicable escape. Anyway, those four days felt like 40 years or 50 years to me. Those were slow hours, and each and every day was long and stretched out. That's the way it was.

I was shivering with the cold, and my teeth were chattering, making rattling sounds. I was wet with cold swirls from the sea, although it was already June. And the winds were blowing up from below. So I often asked myself, was it worthwhile abandoning my aging parents to prolong my lonely life this way? I'd become involved with the uprising after joining the Worker's Party of South Korea, so I blamed myself and questioned whether I joined the organization with honest intentions. Those four days were infinitely long, during which I learned just how much of life is accompanied by pain and bitterness. It was inscribed deep in my bones, the realization that to be alive is to be in pain. Many times I thought about jumping in and just ending my life. Everything pertained to my death, like in my dream, to show how my discarded dead body would look floating in the sea, or raising my hands in the air, getting taken in by the enemy forces and tortured to death. It was all I could think during those four days... Perhaps it was my way of enduring the cold. I wonder why I felt so cold.

It was the beginning of June, so the wind should have been lukewarm, but it felt icy cold, and I remember the stowaway boat to Japan arrived a day late. They threw me a rope, and that's how I got on the boat. If that hadn't happened, I was beyond exhausted from those four days. For four days, I was inundated with the sound of the wind cutting through the island and traveling through the cracks of its stones, and now I recall this sound as cries from this reef, from Jeju Island.

What pierced through my bones while I was hiding was the dulled sound of the wind in the waves. The wind was not a sound that flowed straight in one direction but a sound that is blunted with every swell of a wave. So the sound of the wind I remember from the reef is different from the one I used to hear in Jeju Island... The wind' s sound on the reef was more like the softened sounds of waves.

Just past 2 am, the boat traveled east from Guantal. The other side of Jeju Island appeared distant and faint. However, what was clearly visible was the Ilchulbong (Seongsan Ilchulbong, also known as Sunrise Peak) on the eastern edge of the perfectly egg-shaped Jeju Island; it's written as "日出峰" and a tourist attraction from a volcanic eruption. I could see the cone shape clearly.

I was sitting on a chimney behind the captain's office, above the engine room with my belt fastened until we had escaped the Korean territory of Jeju Island. I can't remember the smell during the escape.

First of all, the hold was covered thoroughly so the water wouldn't get in... Well, how many were there, about three holds that were half the size of a tatami mat with 6, 7-centimeter thick lids that looked like a Baduk board. Most importantly, upon opening the lids, it was apparent there was no room for people, and besides, the smell of fish that permeated the grains of the steel place that had once been filled with fish, and most of all, the smell of heavy oil, was so unbearable that I couldn't bear to go in.

So I escaped the Korean waters sitting inside a triangular chimney of the engine room behind the captain's cabin with the seat belt tightened. When we finally entered Japan's Inland Sea, I went into the fish hold, but it smelled unbearable. People were completely sealed in a tiny room. Almost ten people stuffed inside a space that was the size of half a tatami mat—holding their knees tight. If I have to describe it in words, it smelled of a room with layers of exhalation, stuffed with stagnant breaths. The smell was beyond unbearable for me.

I could only hear the sound from the engine room, engines going pyong pyong pyong pyong.

It was a 4-ton boat that I was on, and it must have been bought as a Japanese fishing boat from Japan. Some people did businesses there. Those on board were not worried about anything anymore. Since Japan lost the war and my country was liberated, more than 60,000 people returned to Jeju Island like a tsunami, but those who came back could no longer live in Jeju... they had no cash income. So most of them were people heading back to Japan. While it is true that I hid in Guantal because I was in a hurry, they wouldn't let people involved in the Jeju Uprising on the stowaway boats. They said doing so would get everyone killed. Because of that, my father and mother would have sold every and anything that could be exchanged for money. As long as I lived, my parents would have been destitute.

Once the radar caught that we had entered the Japanese Inland Sea, we were told to stay quiet. The apparent difference was that the boat was swept to the end of Kagoshima by a thunderstorm and then went into the inland sea off Kagoshima' s coast. As soon as we went around Kagoshima, the Japanese sea had become calm, which I could tell from the pyong pyong sounds of the engine. It was quiet, and the boat barely shook. I was weirdly thinking about how Japan is now a peaceful place. And I could hear my body, I was nervous about the sound of boats coming and going, and if I was caught, the other people, unlike me, were just regular stowaways and not being chased by the punitive force. They'll just be sent back, but I knew I'd be done once I was caught, so the boat's sound caused extreme anxiety. At one point, there was a boat near me, and I felt like I heard the sound of my heart.

After we entered the Japanese Inland Sea, I also went into the hold. This is a complex consequence of colonial rule. After Japan lost the war, the people on board went back to the homeland they so longed for, but they couldn't manage to make a living, so now they had to return. They were low-wage workers living in Japan during colonial rule. So their lives in Japan must have been brutal and harsh, but they were all so happy, being on the Japanese inland sea. I'm sure their happiness had to do with escaping the bloody, deadly tragedy of the April 3 incident. Still, the joy of returning to Japan, returning to where they originally lived, spread, and they excitedly shared stories. On the contrary, I had managed to survive until now, but my chest felt heavy, as though a lump of lead was inside me, with sadness and exasperation thinking about where and how I could continue my life in Japan, a place in which I had no family and where I couldn't tell east from west or north from south. But somehow, people told me about Tsuruhashi, where many Koreans lived; this was when we called the Loop Line the Joongdong Line, and some of the men offered to take me to Tsurushima, so I was looking forward to that. I know now it's where Maiko's Beach is located. But as soon as we got there, everyone scattered like a spider web. I became genuinely alone on the beach. I didn't know humans were capable of crying so much, I thought I had exhausted all the tears. The water was soaking me up to my knees. When the boat finally turned around and went away with pyong pyong sounds, my tears really poured out. I didn't know what to do. Even if I got off, I wouldn't know where to go. I didn't even know where Osaka was. Governance is cruel.

"Clementine" is a song I can still sing in its entirety, and it's also a song I find myself humming while doing things. It's just that my voice has gotten hoarse as I've aged.

The Korean pro-democracy struggle, which lasted nearly 30 years, was triggered by opposition to the signing of a treaty with Japan and led to the beginning of the pro-democracy struggle. I enjoy songs from this period of struggle. For example, one of the well-known songs I like is called "Achim Iseul (Morning Dew)," also known as "朝露," and I enjoy other similar songs. Also, I remember being amazed when I first encountered Korean songs from this period because I didn't realize my country had this kind of (musical) culture. "Naei Maeum" (My Heart) was the first song I had heard since the end of World War II, sung by a professional soprano, and I felt as though my whole body had melted away and been cleansed upon listening. So I like the songs from my country, though it's something I only learned about after the war. Even today, I'm still most drawn to songs sung during the struggle for democracy.

Here, I am going to share a story about a song.

"Nae Maeum" (My Heart): "Maeum" means heart, "Nae" means me, so it comes together to say "my heart." It's a poem from a poet. It's got great lyrics. "My heart is a lake/ Stir you (no)/ I hold your white shadow/ Break like a jade" This is the first part of the lyrics.

My voice isn't feeling well today. If today' s recording is no good, let' s try again tomorrow...

As a poet who writes about songs, I've always been wary of them. Because many of the songs that we sing every day are really sinful. I was born on December 8, 1928, at least according to the official papers, because my family registered me based on the lunar calendar. Therefore, I was born when the colonial rule of Japanese imperialism permeated every aspect of life, both institutionally and socially. In my experience, it wasn't that I received the physical mistreatment of Japanese imperialism. How the empire came to me (the Japanese colony) was a sweet, gentle Japanese melody. I still sing it often. From Japanese lyrics to chant songs, there is no Japanese song that I don't know. These are songs I sing often. So the song "Yuyake Koyake," which is widely sung by children, is one of those songs. There is no scenery in my country that matches the lyrics of this song. Even in the countryside, every single house door was tilted, and those thin, straw roofs looked like they were about to be blown away with the wind. When you encounter a beautiful song like "Yuyake Koyake" in such landscapes, you sing while imagining a Japanese forest with a dedicated guardian deity. I had hoped my country would soon become a country of beautiful songs, and in doing so, I was always encouraging myself to become Japanese. Therefore, I'm guilty. These days, Japanese media and tv shows highlight songs from the Showa era and praise it as a shining period in Japan. Japanese lyricists spend a lot of time, especially on television, introducing how beautiful the songs are. I feel incredibly uneasy about the national, social, and political situation in Japan. Singing is not about nourishing your flesh; it is about expanding the empathy of your heart. When you get used to a song, it's

Borom

Borom in 1930s

something that you remember, and even if you forget the rest, you still remember the song, and once you start singing, you start to think that when the song was sung that it was the best of times. After the war, Japan suffered a food shortage, but when I listen to songs from that period, I feel close to the music and think it was a good time. As a writer of poetry, I am wary of songs because songs do not have flesh. To speak in my style, the fact that songs are sinful is (evident in) the most popular children's song, "Warabe Uta," a popular children's song that can be found in the Japanese elementary school of the early 1930s, at the end of the Daisho period. The Japanese invasion of Manchuria, also known as the Manchurian Incident, was the beginning of Japan's subsequent 15-year Pacific War. During that time, a children's song movement occurred in Japan, and all Japanese poets began to write children's songs. Most of them have remained through time and are still sung today. The reason songs are guilty is that even Japanese soldiers sang them while thinking of their wives and children back home during the war. I know many soldiers like them, and these people sang these beautiful songs and yearned for their families and hometowns. But they were, at the same time, unable to experience pain or remorse for the people they’ d killed, burned, and looted as they committed atrocities under the Three Alls Operation. Singing makes it possible for them to do such things. That's why Japanese songs are considered beautiful. Japanese songs would be top of the world in terms of volume if you counted all the Japanese lyrics to chant songs. But in the end, these types of Japanese songs enable their singers to yearn for their homes and families while desensitizing them to the pain of the despicable things they've done. And I still sing these songs today. I sing to ruminate on the killings of people who can't sing them, and for a beautiful song to become truly beautiful, we must stop tarnishing them with inhumane acts. Songs, in particular, take on different lives depending on the time and place. In Okinawa, the elders on the island have been staging a sit-in for 3,000 days opposing the Henoko base. When they sing "Red Dragonfly" or "Home," these songs take on different lives. That's why songs have no flesh. People can quickly become one by empathizing with their emotions. The power of singing can especially be powerful in a country like Japan, where people are good at coming together under a cause like nationalism. Someone I think of as my teacher and mentor once said, "There is no start to the Reconstruction Agency without a song," and the song now is taking on a specific role. As someone who writes poetry, I think songs are essential, and a song is truly beautiful only when the singers carry over the goodness they are singing into life. It's also true that someone can sing a good song while being apathetic or supporting the removal of Article 9 of the Constitution, and Prime Minister Abe remains popular as ever. I'm sure most of those people like Japanese lyrical songs. And that's why I'm always wary of songs. That is all.

Kim Sijong

***Kim Sijong**

Born on December 8, 1928, in Busan, Korea. As the only child to his father, Kim Chan-guk and his mother, Kim Yeon-chun, Kim Sijong was temporarily raised by his grandfather in Wonsan, Hamgyeongnam-do. He grew up on Jeju Island and went to Japan as a stowaway for his involvement in the Jeju 4.3 Incident (1948). He started writing poetry in Japanese in the 1950s, and actively engaged in the cultural activities of the Zainichi movement (Koreans in Japan) in Japan. However, after the change in the movement’ s course, he was criticized from within and left subsequently. He was a lecturer of Hyogo Prefectural Minatogawa High School (1973-92) and a special advisor to the Osaka Literature School. He is a poet. His major works include poetry: Horizon (1955), Japanese Fudoki (1957), a collection of feature poetry Niigata (1970), Poetry of the Wilderness (1991), Summer of Fossils (1998), Poetry of Borders (2006), The Lost Season (2010), etc., and essays: Clementine's Song (1980), In the Niche of Zainichi (1986), Poetry of the Grass (1997), My Life and Poetry (2004), Lived in Joseon and Japan (2015), among others. (Kim' s biography was extracted from Fujiwara Shoten' s website.)

ACT 1: Winds

ACT 1: Winds

ACT 1: Winds

Recordings of wind are collected from the following locations:

- 알뜨르 비행장 : 제주특별자치도 서귀포시 대정읍 상모리 1629-8 The Altteuleu airfield: 1629-8, Sangmo-ri, Daejeong-eup, Seogwipo-si, Jeju-do
- 천주교 신창성당 용수공소 : 제주특별자치도 제주시 한경면 용수길 149-9 Catholic Church Sinchang Cathedral Yongsu station: 149-9, Yongsu-gil, Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do

Borom

Borom in 1930s

- 성굴 (도구리할망 굴) : 제주특별자치도 제주시 한경면 성굴로 Seonggul (Doguri Halmang Gul): Seonggul-ro, Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 도두 알작지 (도두항) : 제주특별자치도 제주시 도두항길22-2 Dodu Aljakji beach (Dodu Port): 22-2, Doduhang-gil, Jeju-si, Jeju-do
- 당산봉 (생이기정-새의절벽) : 제주특별자치도 제주시 한경면 용수리 산59 Dangsanbong (Saengi-gijeong = Bird's cliff): 59 Yongsu-ri, Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do, South Korea
- 수월봉 (용암지층, 태풍) : 제주시 한경면 Suwolbong (Lava strata, Typhoon): Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 제주시 공설공원 묘지 : 제주특별자치도 제주시 연동 Jeju City Public Park Cemetery: Yeon-dong, Jeju-si, Jeju-do
- 제주 관음사 세불선원 : 제주특별자치도 제주시 산록북로 690-1 Jeju Gwaneumsa Sebul Zen temple: 690-1, Sallokbuk-ro, Jeju-si, Jeju-do
- 상가리 귤 과수원 (새, 바람) : 제주특별자치도 제주시 애월읍 상가북2길 19 Sangga-ri Tangerine orchard (Bird, Wind): 19, Sanggabuk2-gil, Aewol-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 4.3학살터 (사라진 마을) : 제주특별자치도 서귀포시 안덕면 동광리 233 4.3 Slaughter ground (Lost town): 233, Donggwang-ri, Andeok-myeon, Seogwipo-si, Jeju-do
- 사라봉 (영등굿) : 제주특별자치도 제주시 건입동 사라봉동길 74 Sarabong (Yeongdeung-gut): 74, Sarabongdong-gil, Jeju-si, Jeju-do
- 우도검멀레해변 - 경안동굴 (해안동굴) : 제주특별자치도 제주시 우도면 우도해안길 Udo Geommeolle Beach - Gyeongan Cave (Coastal cave): Udohaean-gil, Udo-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 교래자연휴양림 (꽃자왈) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 남조로 2023 Gyorae Natural Recreation Forest (Gotjawal Forest): 2023, Namjo-ro, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 용담 다끄네포구 : 제주특별자치도 제주시 용담2동 1092-7 Yongdam Daggeune Port: 1092-7 Yongdam 2-dong, Jeju-si, Jeju-do
- 하도 - 종달 올레길 (돌담, 바람) : 제주특별자치도 제주시 구좌읍 해너박물관길 26 Hado – Jongdal Olle Trail (Stone wall, Wind): 26, Haenyeobangmulgwan-gil, Gujwa-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 하도 (철새도래지) : 제주특별자치도 제주시 구좌읍 하도리 53-2 Hado (Habitat for Migrant Birds): 53-2, Hado-ri, Gujwa-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 하예포구 (밤바다) : 제주특별자치도 서귀포시 하예동 1729-1 Haye Port (Night sea): 1729-1, Haye-dong, Seogwipo-si, Jeju-do
- 함덕해수욕장 (마을) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 신북로 Hamdeok Beach (village): Sinbuk-ro, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 북촌포구 (4.3학살터) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 북촌9길 26-1 Bukchon Port (4.3 Slaughter ground): 26-1, Bukchon 9-gil, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 관탈섬 (괘계) : 제주 북 27km (좌표 : 동해 33°43'50.8"N 126°21'22.6"E) Guantal Island (Gwagge): 27 kilometers north of Jeju City (coordinate point: east sea 33°43'50.8"N 126°21'22.6"E)

ACT 2: Basalt Rocks

Basalt is a dark-colored, fine-grained, igneous rock, formed from the rapid cooling of lava. It often contains holes left by gas bubbles.

See the map of Jeju island at the back cover of this booklet.

ACT 3: Postcard in Wardah

Recited by Khalid Odeh

“I’m a Palestinian refugee in town. Maybe that’s why I understand the difficulties you might be facing as foreigners here. I hope the war will end in Yemen and that it will become a prosperous country that is welcoming to refugees from all over the world. I also hope all countries open their doors to refugees and that wars end all over the world.” - Shadi

ACT 4: Yeongdeung Halmang

A farewell ritual for Yeongdeung Halmang (Goddess of Wind) by Shaman Oh Yong-Bu in Gwangchigi Beach on March 9, 2020

ACT 5: Songs

The following playlist is provided by a “Hope School” member from Yemen in South Korea. Hope School was founded and located on Jeju Island with an aim to build a supportive community between island residents and newly arrived Yemenis who seek asylum in South Korea.

- 1.Chanyeol (EXO) & Punch - Stay With Me**
- 2.LYn - The Legend of the Blue Sea**
- 3.Younha - I Believe**
- 4.Adham Nabulsi - Hada Ma Byentasa**
- 5.Rahma Riad - Mako Menni**
- 6.Aseel Hameem - Enta Al Saadah**
- 7.Faia Younan - Ohebbou Yadayka**
- 8.XXXTENTACION - changes**
- 9.Adele - Someone Like You**
- 10.Rihanna - Love The Way You Lie**
- 11.Abeer Nehme - Waynak**
- 12.Ramy Gamal - Sa'af**
- 13.Rihanna - Diamonds**
- 14.Qomery Molatham - Hadeel**
- 15.Best Songs Of Justin Bieber - Justin Bieber Greatest Hits Cover 2017**
- 16.Clean Bandit – Rockabye**

ACT 6: Clementine, My Heart & Morning Dew

Hwang Geum-Nyeo in Jejuan:

Jeju Island was a good, welcoming town. When people met, they would greet each other by asking if they’ve had a meal. People had so much generosity in their hearts. It all changed after the 4.3 incident on Jeju Island, and everyone became mute after the event’s catastrophic shock.

Jeju Island is an island towering over the sea, so the wind has no place to rely on. There are more than 30 names for the wind, so you cannot use all of them. I remember flying a kite as a child. The girls followed when the boys were flying kites.

When I was young, Jeju's air always had a scent of the sea. The air was thick with the scent of the sea and always felt moist. Jeju’s wind is so special because they smell different from season to season: mugworts in the spring, grass in the summer, wild chrysanthemum in the fall, and warm winds in the winter.

The stones of Jeju Island were formed through volcanic activity. They are made of basalt, so they absorb water well. So there is more field farming than paddy farming on Jeju Island. The view is an absolute treasure when you see the stone walls blending well with the natural scenery. Our ancestors called the holes within these stone walls a hole of breath.

On the day of sacrificial rites next door, the smell of delicious food would come in, so I would put my face against the hole in the stone wall, smell it, and watch the food being prepared. I watched my neighbor’s family come and go through the hole. And young men and women would notice and sneak looks of each other through the stone walls. They would fall in love and become eventually married that way.

When talking about wind, there are so many types of wind in our town. Because it is an island that arises in the middle of the sea. The winds from all sides have nothing to rely on. So they all go swirling around Mountain Halla.

There are more than 30 names for wind. You ask how to live in a windy place. We live in the rhythm of the sweltering sun, thewind smashing the stones, and the clouds steaming in the mountains according to the season.

First, let’s start with the direction in which the wind blows. The four winds are Saetborom, Hanuiborom, Maporom, Nopborom. The Saetborom is the east wind, the Hanuiborom is the north wind, the Maporom is the south wind, and the Nopborom is the northeast wind.

Shaman Seo Sun-Shil (excerpt):

When Yeongdeunghalmang comes to Jeju Island, everyone has to be careful. Jejuans didn't even do the work of trimming the blankets or taking out farm manure during this time. They’d stay quiet during this period and then start working again when the Yeongdeunghalmang passes, and the warm breeze begins to blow.

To Kim Sijong, who has been instrumental in sharing the pain of Jeju Island. I had watched your appearances on TV and finally had the chance to meet you in Tsushima. I was so relieved and happy to see you looking healthy. Thank you for your continued interest in Jeju Island.

Borom

Sung & performed by Kim Sijong & Jung Shin-Ji

On a Vast Wide Open Seashore

There's a little grass-hut
There's a father who catches fish
And a daughter he doesn't know.
Oh my love, oh my love, Oh my love Clementine
You left the old man all alone
Oh, wherever did you go?

My heart

Lyrics: Kim Dong-myeong
Composed by: Kim Dong-jin
Translated by Kevin O' Rourke

My heart is a lake
Row toward me, love
Your white shadow I' ll take in my arms
I' ll break like jade on your prow

My heart is a lamp
Close that door, love
I' ll burn in silence to the last drop
Shimmering on your silken dress

My heart is a wayfarer
Play your pipe, love
I' ll bend my ear in the moonlight
And listen desolate through the night

My heart is a fallen leaf
Let me stay a moment in your garden, love
I' ll leave when the wind rises again
And go my lonely wayfarer road

Achim Iseul (Morning Dew)

Lyrics and Composition by Kim Min-Ki

Staying up for a long night, on every blade of grass
I see the drops of morning dew, prettier than pearls
As sorrow rankles my heart like beads of dewdrops
I climb up the morning hills and learn a little smile

The red sun rises on the graveyard
And scorching heat is my trial
I go now, into the harsh wilderness
Leaving all the sorrow, and now I go

As sorrow rankles in my heart like beads of dewdrops
I climb up the morning hills and learn a little smile

The red sun rises on the graveyard
And scorching heat is my trial
I go now, into the harsh wilderness
Leaving all the sorrow, and now I go

Borom

Special interview & vocal appearance:

Kim Sijong
(conducted by Hong-Kai Wang and facilitated by Kang Shinja and Liou Lin-Yu)

Sound recording, design & mixing:

Kang Kyung-Duck (LAMP Studio)

Production coordination:

Kwon Sanghae

Performers:

Hwang Geum-Nyeo, Jung Shin-Ji, Khalid Odeh, Seo Sun-Shil

Shamanic ritual:

Oh Yong-Bu

Act 5 playlist:

Hope School member

Translation:

Helen HY Kim (Korean to English), Kwon Sanghae (Japanese to Korean),
Paula Farran (Arabic to English), Tsan Muju (Japanese to Chinese),
Fumihiko Sumitomo & Jun Igarashi (English to Japanese)

Kim Sijong's interview transcription:

Hanako Chiba (Japanese)

Proofreads:

Helen Kim, Kwon Sanghae, Fumihiko Sumitomo

Research assistance:

Zheng Xiaoli

Booklet editor:

Kwon Sanghae

Design:

Yoshiki Terasawa

Acknowledgement:

Baek Gayoon, Bill Dietz, Emily Wang, Han Jin-Oh, Hong Leeji, Hope School,
Ho Tzu-Nyen, Kang Shinja, Keijiro Suga, Kim Inseon, Kim Seongnae,
Ko Wan-Soon, Lee Dohee, Lee Jun-Ha, Liou Lin-Yu, Nien-Pu Ko, Park Eunhye,
Wardah Restaurant, Yin-Ju Chen, Yong Sumi

Commissioned by

Arts Maebashi, for the exhibition "Listening: Resonant Worlds"
(Dec. 12th, 2020 - Mar. 21, 2021)

Supported by

The National Culture and Arts Foundation in Taiwan and Jeju Biennale

Cooperated by

Department of Arts Studies and Curatorial Practices, Graduate School of Global Arts,
Tokyo University of the Arts

《보롬》 감상 가이드·플레이빌

원하는 순서대로 듣고, 읽고, 보고, 이동해 보세요.

《보롬》 2020

복합매체 설치 / 왕홍카이 기획

정의에 따르면 바람은 공기의 움직임, 힘, 숨, 냄새, 암시, 나침반의 한 지점 또는 신체에서 생성되는 기체이다. 프로젝트 《보롬》('보롬'은 '바람'의 제주 방언을 가리킨다)에서 '바람'은 제주도에서 느낄 수 있는 자연적, 정치적 힘 뿐만 아니라 제주의 풍경과 말, 소리, 삶의 방식을 형성하는 물질적, 영적 힘이라 할 수 있다.

《보롬》은 제일한국인 시인 김시종이 제주 4.3 사건에 연루됨을 계기로 1949년 제주도에서 일본으로 탈출한 여정을 출발점으로 삼아, 바람의 움직임에 생동감 넘치는 레퍼토리로 엮어낸다. 이 레퍼토리는 인간, 신, 물질, 존재, 사물과 같이 비인간적 대상과 인간적 대상 모두와 만나는 다원적인 방식으로 구성된다. 또한 레퍼토리는 급변하는 역사, 신화, 풍경, 지리, 욕망, 위험, 피난, 시를 가로지르는 다양한 관계망을 통해 길을 만드는 기술과 항해술을 아우르는 성좌의 구성 방식을 담고있다. 목격하고, 꿈꾸고, 공모하고, 기억하고, 망각하고, 경고하고, 느끼고, 듣는 것들 사이에서 《보롬》은 질문한다 : 무엇이 ‘함께 하는’ 다양한 방식을 구성하고 구조화하는지. 또한 ‘유대감’ (혹은 ‘연대감’)이 어떻게 공기와 숨, 기체 그리고 행위주체의 형태로 분포되고 이동하는지를.

‘바람’은 형태가 없다. 따라서 이 작품은 하나의 형태에서 다른 형태로 변화하는 바람의 움직임과 같이 관객, 악기, 연주자, 환경 등이 변화하는 여행 콘서트라 할 수 있다. 레퍼토리는 다양한 주제로부터 소환해내는 김시종의 기억을 따라 제주도의 땅과 바다에서 일본으로 이동한다. 《보롬》은 김시종의 궤적을 따라 바람에 이끌려 거리와 차이가 근본적으로 연결될 수 있는 또 하나의 시공간을 상상하고, 탐색하고, 발아시키고자 한다. 아마 이 작업을 공유하는 과정에서 또 다른 형태의 유대와 연결된 장소, 시간, 그리고 신체가 나타나게 될 것이다. 만일 그렇다면 바람의(으로서의) 역사는 무엇을 의미하며 어떻게 그 스스로를 표현해낼 수 있을까?

*김시종과 함께 듣다

나라와 타이페이에서 화상통화, 2020년 3월 13일

왕홍카이 인터뷰 & 튜링유, 강신자 진행

저는 제주도에서 7살 때 제주도에 와서 소학교를 지금의 제주시의 중심지에서 단 하나 뿐인 정규의 6년제 보통학교, 그 후에는 국민학교가 되었지만 그 곳을 졸업했습니다. 그러니까 소년기와 사춘기의 대부분을 제주도에서 자랐던 겁니다. 그럼에도 불구하고 저의 뒤랄까 체감적인 느낌이라고 할까, 솔직히 말씀드리면 제주도를 지극히 사랑합니다만 체감적 생리적으로는 좋아하지 않습니다.

그것은 제주도에 대한 기억이 좋은 추억이 그다지 없기 때문입니다. 제가 성인이 되고 일본에 와서, 제주도나 한국의 일에 관여하고 공부하면서 그러한 도리도 알게 되었지만, 우선은 소년 시절에 제주도의 악동들, 아이들로부터 제주도 말로 ‘육지 새끼’라고 합니다만 ‘육지에서 온 새끼’라는 식으로 괴롭힘을 당했습니다. 제주도는 본토와 떨어져 있기 때문에 생활문화가 상당히 다르고 말도 본토에서는 통하지 않아요. 그런 이유로 제주도 사람들은 본토에 대해 ‘육지’라 부릅니다. 한국말로 陸地라 쓰고 ‘육지’라 말합니다. ‘육지 새끼’

라는 말은 짐승을 해아릴 때 쓰는 마리에 해당하는 말입니다. 나쁜 말이에요. 아버지가 북한 출신이라 되레 그렇게 불렸어요. 그리고는 사춘기부터 청춘기에 걸쳐 4.3사건을 겪으면서 4.3사건의 잔인하고 처참하기 그지없는 광경을 한도 없이 보게 되었고, 소용돌이 속에서 줄곧 기어 다녔기 때문에 기억이라고 하면 제주도에 대한 좋은 추억이 없습니다. 사랑하지만 좋아하진 않는다는 것은 그런 뜻입니다.

조금 더 거기에 정확한 내용을 덧붙이자면, 제주도 사람들이 본토 사람을 말할 때는 아이에 대해서는 지금 말한 한 마리 두 마리에 해당하는 ‘새끼’라 말하지만 어른, 성인에게는 ‘육지 놈’이라 말합니다. ‘놈’이라는 것은 ‘무리’나 ‘녀석’과 같은 말에 해당합니다. 그러니까 좋은 표현이 아닌거죠. 그러한 말투의 깊은 곳에 있는 생각은 말이죠, 방랑자, 외지 사람, 밥줄이 끊긴 사람이라는 기이한 감각이 크게 작용하는 말입니다. ‘육지 놈’과 ‘육지 새끼’는 말이죠.

그리고 그런 본토 사람들, 경상도나 전라도처럼 제주도와 가까운 곳에 사는 사람들은 당연하다는 듯이 제주도 사람을 ‘제주 놈’이라 부릅니다. ‘제주도의 무리’나 ‘제주도의 녀석’이라는 식으로 깁니다. 그들은 몽고의 통치를 40년 가량 받았어요. 꽤나 길게 몽고의 세력권에 있었기 때문에 아이가 태어나면 서울로 보내고 말과 짐승을 키우고자 하면 제주도로 보내라는 말은 제주도 사람들을 깁보는 말입니다. 이걸 말이죠 조금 더 보태자면 4.3 사건의 비극, 본토 사람들이 제주도 사람들을 그토록 학살하고도 친근감을 느끼지 못했던 것의 증거가 되기도 하는 이야기입니다.

대만의 역사나 본토(중국대륙)와의 관계에서도 뭔가 공통되는 부분이 있지 않을까 하는 생각이 듭니다.

제주도에 간 기억은 소년 시절 여름 때였고, 정확히 스무 살 때 제주도를 탈출했지만 제주도에서는 바람이 언제나 중천에서 소리를 내고 있습니다. 귀를 울리듯 중천에서 바람이 소리를 내고 있는 곳이 제주도입니다. 그래서 제주도에 가면 일단, 지금은 그렇게 큰 관광지가 되어 버렸지만 좀 더 소박했을 때의 제주도는 무엇보다도 바람 ‘냄새’가 납니다. 제주도는 바람이 강한 것으로 유명합니다. 바람과 화산암이 많이 있고 여자가 많다고 하여 삼다도라 부릅니다. 세 가지가 많은 섬. 바람, 돌, 여자가 많은 삼다도가 제주도의 별명입니다. 그래서 제주도에 가서 먼저 느끼게 되는 것은 바람 소리이고, 게다가 맑은 날에도 바람이 없는 날에도 중천 깊은 곳에서 어떤 소리가 나고 있는 것이 웬지 귀를 울리는 듯 들립니다. 그리고 거기에는 언제나 냄새가 있고 작 달라붙은 채로 휘돌아치고 있어요.

제주도의 바람 냄새는 특히 바닷가, 해변가에 가면 바다 냄새, 해변 냄새가 강합니다. 지금은 제주시의 바닷가였던 곳은 온통 메워져 육지가 되어 버렸지만 제가 스무 살 즈음까지는 아직 간척이 이루어지지 않았어요. 제주시의 바닷가에는 해녀들이 주로 있는 모래밭이 있고 어부들이 만든 모래밭이 있어요. 그리고 바다의 냄새도 달라요. 왜냐하면 제주도는 모래사장이 아니라 자갈밭이에요. 아까 홍카이 씨가 질문하신 것이 현무암인가요? 돌맹이가 파도에 몇 천년 동안이나 파도에 쓸리고 부딪혀 굴러다녔기 때문에 온통 둥근 돌이 바닷가를 메우고 있는 것이예요. 그래서 제주시의 바닷가는 여울, 썰물이 빠지면 여울에서 제주 시내 해변의 사람들은 썰물이 빠진 곳에 썸이 있어서 그 식수를 마십니다. 그러면 조금 염분이 있긴 하지만 그 냄새는 제주시의 바닷가 냄새와는 다른 거예요. 해초의 냄새가 강한 곳이나 잔 물고기기의 냄새가 강한 곳의 바람은 (이런 계란형의 작은 섬입니다만) 냄새가 다른 지방과 달라요.

제주도는 바람이 강하기도 해서 냄새와 소리가 반드시 달라붙어 있어요. 10미터, 20미터의 바람은 거의 바람이라고 생각할 수 없는 생활입니다. 육지와는 달리 말이죠. 조금 바람이 세지면 반드시 제주 시내는 바람이 무언가를 베는, 특히 전선을 베는 소리를 제주도 사람들은 ‘전봇대가 운다’라고 말하는데, 바람이 전선을 베고 그 베어지는 소리는 흥, 풍하는 소리가 납니다. 그런 소리가 나면 어부들과 농사하는 사람들도 작업할 때 조심하기 시작해요. 그리고 돌맹이 틈새를 뜨는 바람이 한결같이 일어납니다. 게다가 화산암으로 된 돌담은 대장 크기의 돌과 작은 구멍으로 만들어졌기 때문에 그 틈새를 뜨는 바람에는 교향악과 같이 수많은 복잡한 소리가 섞입니다.

그리고 이 냄새와 바람에는 4.3사건의 참극이 반드시 관련되는데 거기에는 저의 기억 이상으로 생리적인 체험이 결부되어 있어요. 제주도의 4.3사건이 일어나고 나서는 지금 같은 여름 바람에 더해서 인간이 썩는 시체 냄새가 허공을 맴돌고 산에서 불어오는 바람이 내려옵니다. 것처럼 불타버린 마을의 누린 내가 섞여 4.3 사건 당시 줄곧 제주도에 넘쳐나고 있었습니다. 그것은 소용돌이 치는 듯 멈춰있는 것 같은 바람이었어요. 그래서 바람에는 냄새도 소리도 달라붙어 있다는 것이 저의 기억입니다.

Borom

저는 이 바람에 관한 것, 바람이 냄새를 동반하고 소리가 얽혀있는 것에 자극을 받았어요. 제주도는 계란형의 섬이니깐요, 바람에 상관없이 온종일 크고 작은 파도가 바닷가를 쓸어내고 있어요. 그 바람에 상관없이 바닷가를 쓸어내고 있는 파도를 ‘잔물결’ 이라고 합니다. 그러니까 제주도의 바람을 말할 때 강한 바람만을 먼저 떠올리기 쉬운데, 제주도는 본토와 떨어져 있는 고아의 섬과 같은 곳이기 때문에 온종일 바닷가를 쓸어내고 있는 잔물결이 있습니다. 이 잔물결과 바닷가를 이루고 있는 것도 제주도 특유의 바람인 것이죠. 조용한 바람은 잔물결을 일으킵니다. 그와 동시에 저에게 제주도의 바람은 우선 바다에서 오는 바람이 파도를 일으키면 모래사장이 아닌 자갈밭이기 때문에 자갈이 ‘고-고-’ 하고 소리를 냅니다. 파도가 부딪칠 때 밀려날 때 돌맹이 덩어리는 몇 천년이나 파도에 쓸립니다. 이들 모두 둥근 모양을 한 현무암이지만 색깔은 바닷가를 이루는 돌은 오랫동안 쓸렸기 때문에 흰색을 띠고 있어요. 푸른색을 띤 흰색에 가까운데 그 중에는 검은 돌도...

자갈밭은 ‘고-고-’ 하고 소리를 냅니다. 그러니까 이 4.3사건이라 하면 자갈밭을 부딪치는 ‘고-고-’ 하는 부딪치는 소리, 그 자갈밭 소리가 저의 귓속에 지금도 생생합니다. 특히 1948년 4월 3일에 제주도 ‘인민 봉기’ 라고 우리들은 부르고 있지만 봉기 사건이 일어나는데, 미군에 지원받은 군함까지 끌고 왔어요. 토벌대들이 말로 다 하기도 힘든 잔인하고도 잔학한 살인 방법을 사용했는데 제주도의 작은 항구 주변에 크고 작은 창고가 십여 군데 있었습니다. 선박회사가 짐을 보관하거나 다음 배에 타기 위한 짐을 승계하는 창고가 있는데 4.3사건에서 대학살 작전이 시작되면서 문답무용으로 연행되어 가는 마을마다 사람들은 그 창고에 모두 밀어 넣어진 거예요. 그리고 나면 그 다음 조달할 창고가 더 이상 없기 때문에 다음에 사람들이 연행되어 오면 먼저 들어가 있는 사람들이 어떻게 되었나 하면, 항구 동쪽에 ‘사라봉’이라는 언덕이 있는데 그곳에 기습을 파서 모두 그곳에 던져 넣었어요. 그러면 유가족들이 그 썩은 구더기 들끓는 곳에 달려가서 손으로 유족을 찾아내면 그 잔학함이 비난받게 되니까 바다로 운반해서 던져 넣는 거예요. 그 때 바다로 던져 넣어 죽이는 사람들을 운반한 것은 미군의 상륙용 주정, 소형의 주정이었어요.

그 때 네다섯 명 단위로 손목을 철사로 꿰인 시체들은 몇 구인가 떠올랐어요. 강한 바람이 멈추고 나니까 그 손발을 꿰인 농민복 차림의 허리띠가 들어 올려져 있었어요. 하반신은 없는 것이나 마찬가지로 자갈밭의 자갈에 쓸리고 파도가 칠 때마다 움직여서, 줄줄 살도 비지 두부할 때 비지라고 아세요? 육체가 그런 상태로 되어 있었어요. 그러니까 조금만 더 쓸리면 백골이 되었을 모습이에요. 그래서 제주도의 바람이라고 하면, 제가 중학교 다닐 때부터 바다와 가까운 집으로 이사를 가서 그곳에서 살았는데, 그곳의 부딪치는 파도와 자갈밭의 자갈 소리와 그 자갈에 쓸린 네다섯 명 단위로 꿰인 시체가 쓸려 떨어지는 소리, 육체도 흰색이라는 기억들이 뒤얽혀 있습니다. 그래서 저는 잔물결을 몰고 오는 바람이 잠잠해져도 제주도에는 잔물결은 언제나 일고 있습니다. 바람이 세면 자갈밭에 소리가 납니다. 그곳에서 학살된 시체가 떠올랐습니다. 그래서 저는 제주도를 사랑하지만 좋아하지는 않습니다.

‘제주도는 현무암인가, 그렇다면 내가 숨어있던 관탈(관탈도)이라는 암초 또한 현무암인가’ 라는 질문. 그래요 현무암인데 그것은 모두 화산에 의해 생긴 암초입니다. 그것도 냄새를 가진 아주 맨질맨질한 현무암입니다. 게다가 높이가 거의 30미터 가까이 되지 않을까요. 제가 그곳에 숨어 들어갔을 때는 관탈도는 바닷새와 칠새의 집산지, 새똥이 새하얗게 눈처럼 덮여 있었는데 지금은 그런 것들은 완전히 사라져 버렸어요. 온난화 때문인지 아니면... 네. 현무암이 맞고 그 질문 그대로예요. 그래서 자갈밭에는 동그랗고도 납작한 색깔이 예쁜... 새까만 돌, 그것을 제주도 말로 ‘먹돌’ 이라 부르는데 ‘먹’ 이라는 것은 숯이고 ‘돌’ 이라는 것은 돌이니까 검은 돌이라는 의미에서 ‘먹돌’ 이라고 부릅니다. 墨石라고 쓰고. 실은 그 때까지 저는 그 동글납작한 먹돌을 줄곧 품에 가지고 있었어요. 그것을 관탈도에 숨어 지낼 때 떨어뜨리고 말았어요. 저도 그렇게 부적같이 가지고 있던 적이 있었습니다. 예쁜 돌입니다. 단단합니다.

제가 이곳으로 오기 전에 있었던 제주도의 바닷가는 자갈밭에다 대부분 현무암 자갈이에요. 그래서 제가 숨어있던 암초도 물론 현무암입니다. 화산의 분화석이니가 그것이 암초를 만들었음테니 현무암이 분명합니다. 그것은 용암이 아니라 해수로부터 올라온 암초군요.

지금의 제주공항 쪽의 동쪽 번두리에 식민지 시대 때 일본군 비행장이 있었습니다. 그것을 ‘정뜨르’ 라고 부르는데 정뜨르 비행장은 지금의 비행장의 동쪽 번두리에 있습니다. 그러니까 그것은 식민지 통치 때부터 있었던 곳으로 정뜨르라고 해서 집단으로 호를 파고 세워놓고 때려 죽여 파묻은 시체의 발골을 새로 하고 있는 곳으로 잘 알려진 곳입니다. 그 정뜨르 비행장의 부지 북쪽에 작은 어촌이 있는데 그건 ‘다끄네’ 라는 마을로 그곳에 작은 항구가 지금도 있고 식수도 그 항구 가장자리에서 샘솟아요. 그 다끄네라는 항구에서

Borom

탈출했습니다.

옛부터 있었던 작은 마을이지만 제주 시내와 인접한 마을, 그 다끄네는 아무 근심없이 어업으로 살아가고 있는 어촌입니다만. 다끄네라는 작은 항구에서 탈출했습니다.

그것은 작은 나뭇잎같은 어선입니다. 아무튼 저는 40킬로미터 정도 떨어져 있다고 생각했는데 문헌에 의하면 제가 숨어있던 암초 ‘관탈’ 이라 불리는 섬은 30킬로미터 정도라고 나와있어요. 대략 육안으로 그 수평선은 거의 50킬로미터라고 하는데 어쨌든 30킬로미터 정도 떨어진 곳이겠죠. 이 때는 저녁이었으니까 겨우 헤엄친 정도였어요. 검푸른 낮에는 도저히 들어가고 싶은 생각이 들지 않는 바다입니다. 파도가 거세니까요. 밤이 깊히고 난 낮 바다의 검푸름에는 정말 놀랐습니다. 역시 밤이었기 때문에 헤엄칠 수 있었던 거예요. 2, 30미터니가 갈 수 있었어요. 그렇게 헤엄쳐서 도착한 섬을 관탈도라고 하는데 정확히 제주 시내에서 보면 작은 후지산 모양으로 보입니다. 후지산과 같은 형태의 암초인데 바다에서 올라갈 수 있는 장소가 아니에요. 안개 낀 바위가 넘실거리고 있었어요. 선착장 같은 것은 물론 없습니다.

그리고 제주 시내에서 그 관탈도의 북쪽, 30, 40미터 떨어진 곳에 있는 암초인데 그 섬을 안쪽, 제주시에서 보면 북쪽으로 굽어져 저를 숨겨주고 있었습니다. 그리고 섬이 마치 하나의 돌과 같이 보인 것이 뒤로 돌아가보면 딱 킴을 걸친 듯한 모양의 암초였어요. 그 빙 돌아서 간 북쪽 가장자리에 갈라진 틈이 아래쪽까지 이어져 있었어요. 분화가 일어난 틈이겠죠. 그 틈 속에 저는 숨게 되었습니다.

꿈을 꾸다라, 잠을 잔 기억이 거의 없어요 4일 동안. 새벽이 되면 그곳은 어장이었던 모양인데 토벌대들이 도발한 어선이 눈 앞에서 고기잡이를 하고 있는 거예요. 어선에 경관이 깃발을 들고 서있고 말이죠. 그래서 숨어있는 것이 말 그대로 목숨이 줄어드는 듯한 일이었고 게다가 관탈도의 바람은 이 또한 만만치 않은 바람이에요. 북풍으로 바람이 불고 말이죠. 하필 틈새에서 뭔가를 가르느 듯한 소리가 물보라를 일으키면서 흥, 쿵하고 말로 표현하기도 힘들 정도로 바람이 밤새 올라오니깐요. 무엇보다도 춥고 이미 70년이나 지났지만 그 밤의 무서움, 고독감은 이루 말하기 힘들고 말로 표현할 수도 없어요. 정말 무서웠어요. 딱 6월 경이었기 때문에 장마가 오는 계절이기도 해서 맑은 날씨인데도 불구하고 별을 볼 시간도 여유도 없었어요. 항상 뭔가 구름이 낀 듯한 느낌이에요. 바람이 불고 파도의 물보라가 틈새를 부딪쳐서 언제나 젖어 있으니까 몸이 얼어웁니다. 어둠의 깊이가 주는 공포는 설명하기도 힘드네요. 정말로 무서웠어요. 자신이 벌레, 벌레도 아니구나, 그것 만도 못하다는 생각이 들었어요. 왜 숨을 쉬고 있는지, 왜 살고 있는지, 이렇게까지 해서 살 필요가 어디에 있는지 생각했어요. 그냥 손을 흔들어 잡혀가는 편이 낫다고 줄곧 생각하고, 뛰어 내려 죽어버리고 싶다고도 계속 생각했어요. 그러니까 잠깐 잠들어도 악몽이 이어지고, 낮에 잠깐 바람이 그치면 항상 부모에 대한 미안함이나 도망치고 있는 자신의 비열함에 대해 자신을 타하는 마음 뿐이었어요. 어쨌든 저는 4일 동안이 40년, 50년이나 되었던 것 같아요. 그 긴 시간, 길었던 하루하루. 그랬던 거예요.

추워서 떨고 있었기 때문에 온종일 이가 달달 소리를 내고 있었고 6월에 접어들었음에도 그 추운 날에 젖어 있었어요 물보라 때문에. 그리고 바람이 밀에서부터 올라오고 있었으니까요. 그래서 늙은 부모님까지 버리고 이렇게까지 해서 혼자 목숨을 부지한다는 것이 무슨 의미인지 계속해서 되뇌었어요. 저는 남도당에 입당하면서 4.3(사건)에 관여하게 되었는데 정말 정직한 생각으로 입당한 것인지 자신을 타하는 마음이 있었어요. 그래서 4일 간은 너무나도 긴 시간이어서 그 동안 줄곧 살아있는 것 자체가 얼마나 고통을 동반하는 것인지, 쓰라린 것인지를 알게 되었습니다. 살아있는 것 자체가 고통스러운 것임을 뼈에 새기게 되었어요. 정말 뛰어 내려서 끝내고 싶다고 줄곧 그것만 생각했어요. 그래서 모든 생각이 자신의 죽음에 관한 것들에 집중되고, 꿈에 나오는 것처럼 언제나 자신의 시체가 방치되어 떠 있거나 자수해서 수용되거나 끌려가 고문을 당해 죽어가는 모습만을 4일 동안... 그런 것들을 생각하는 것이 추위를 견뎌내는 방법이었는지도 모르겠어요. 왜 그렇게 추웠던 걸까요.

6월초였기 때문에 미지근한 바람이었을 텐데 아무튼 얼어붙을 만큼 추웠고 하루 늦게 일본으로 탈출하는 배가 와줬는데 로프를 던져줘서 배에 탈 수 있었어요. 그렇지 않았다면 그 4일 동안 이미 탈진하고 말았을 거예요. 그렇게 4일 동안이나 바위를 베는 바람의 소리, 그 틈새를 가르고 올라오는 바람의 소리가 저를 몰아세웠는데 그건 그야말로 암초, 제주도의 비명 그 자체였다고 지금은 기억하고 있어요.

그 숨어 지내던 암초에서 뼈와 살에 새겨진 것은 바람은 무른 이랑의 소리를 내기도 한다는 것이예요. 바람은 일직선으로 부는 것이 아니라

파도의 물결에 따라 무른 소리를 내기도 해요. 그래서 제주도에서 즐곤 씌었던 바람도 암초에서 들었던 바람 소리와는 (달라요)... 암초에서 들었던 바람은 무른 물결의 소리였어요.

오전 2시 지날 무렵, 관탈도에서 배는 동쪽을 향해 갔으니까요. 그 제주도의 섬 저쪽 편은 멀거니 희미하게 뉘어져 보이는 정도여서 북촌리가 보였던 것은 아닙니다. 다만 분명하게 보이는 것은 계란형의 제주도 가장 동쪽 끄트머리에 있는 일출봉이었어요. ‘日出峰’이라 쓰는데 이곳도 분화가 분출한 관광지입니다. 그 모습은 명확하게 보였지만 북촌리는 보이지 않았어요.

저는 제주도와 한국 영해를 탈출하기 전까지는 선장실 뒤의 기관실 위 굴뚝에 벨트를 메고 앉아있었기 때문에 탈출할 때의 냄새는 모르겠습니다.

우선 덮개를 이렇게 물이 들어가지 않게 완전하게 덮어서... 그러니까 어느 정도일까 6, 7센티미터 정도의 바둑판 모양의 덮개가 있고 선창이 일본의 다다미로 반 첩 정도의 것이 세 개 정도 있는 배였어요. 무엇보다도 그 덮개를 연다고 해도 사람이 들어갈 여유가 없었고 게다가 그 생선을 채워넣은 철관 곁에 스며든 그 생선 냄새, 그보다도 증유 냄새가 아주 견딜만한 냄새가 아니어서 들어갈 여유조차 없었어요.

그래서 저는 선장실 뒤의 기관실 지붕, 그 삼각형 지붕 굴뚝에 벨트를 메고 앉아서 한국 영해를 탈출했습니다. 그리고 일본의 내해에 들어오고 나서 생선을 보관하는 선창에 들어갔는데 그것은 참기 힘든 냄새였어요. 좁은 공간의 밀실이 밀폐된 상태였으니까요. 어쨌든 다다미 반 장의 공간에는 10명 가까이 들어가 있었어요. 무릎을 꺾 안고서. 그래서 굳이 말하자면 좁은 공간의 밀실에 쌓인 한숨, 탁한 한숨같은 냄새랄까. 그러니까 좀처럼 참을 수 있는 냄새가 아니었어요.

소리는 기관실의 소리, 엔진의 퐁퐁퐁퐁하는 소리가 들릴 뿐이었어요.

제가 탄 배는 4톤 가량이었는데 그건 일본에서 어선이었던 것을 사들였던 것이겠죠. 그런 장사를 하는 사람들이. 타고 있던 사람들은 이제 아무 걱정 없어요. 일본이 전쟁에 지고 우리나라가 해방되었기 때문에 쓰나미처럼 6만명 가량이 제주도로 돌아오게 되는데, 돌아온 사람들이 더 이상 제주도에서 살아갈 수 없었어요. 현금 수입이 없으니까요. 그래서 또 다시 돌아가는 사람들이 전부였어요. 제가 관탈도에 숨었던 것도 다급했던 것도 있지만 밀항선에는 4.3사건에 관여한 사람은 절대로 태우지 않았어요. 전부 다 같이 죽임을 당하니까요. 그런 사정때문에 저희 아버지 어머니는 있는 힘껏 돈으로 바꿀 수 있는 물건은 닥치는 대로 팔았을 거예요. 제가 목숨을 부지한 대신 저희 부모님은 무일푼이나 마찬가지였을 거예요.

일본의 내해에 들어오고 나니 레이더에 잡히니까 모두 조용히 있으라고 했습니다.

우선 확실히 다른 것은 일본의 내해였어요. 우리는 가고시마 끝자락까지 폭풍같은 비에 배가 떠내려가서 거기서부터 가고시마 앞마다의 내해로 들어갔어요. 가고시마를 돌아가자 마자 일본 바다의 고요함이 퐁퐁하는 엔진 소리를 통해서도 확실히 알 수 있었어요. 조용하고 흔들림이 정말 적었어요. 그리고 일본은 지금 평화롭다 라는 이상한 생각에 빠져 있었어요. 그리고 제 몸의 소리가 들렸나는 질문은 오고 가는 배 소리에 긴장했고 일단 잡히면 저 같이 토벌대에 쫓기는 몸이 아닌 다른 사람들은 밀항자로서 그냥 돌려 보내지게 되지만 저 같은 경우에는 한번 잡히면 끝이니까 오고 가는 배 소리에는 아주 긴장했어요. 한번은 바로 옆에 배가 지나갈 때가 있어서 제 심장 소리를 저 스스로가 들었던 때가 실제로 있었어요.

일본의 내해에 들어오고 나서는 지도 선창에 들어갔어요. 이것이 식민지 통치의 복잡한 현상이라 해야할까요. 일본이 전쟁에서 지고 애타게 그리워 하듯 모두 자신들의 고향에 돌아갔는데 이제는 생활이 어려워 다시 돌아갔어요. 식민지 통치 중에도 일본에서 저임금 노동자로 살아가던 사람들이예요. 그러니까 일본에서의 생활도 상당히 가혹했을 텐데 이 사람들은 모두 기뻐하는 거예요 내해에서. 우선 죽음의 4.3 사건의 그 유희, 참극의 섬에서 빠져나온 것도 있겠지만 일본에 돌아왔다는 사실, 원래 자신이 살던 곳으로 돌아온 듯한 기쁨이 번져 이야기도 들뜬 것이겠죠. 그리고 정반대로 저는 지금까지는 목숨을 부지해 왔지만 동서남북도 알 수 없고 친척 하나 아는 이 없는 일본에 와서 어디에서 어떻게 생활하고 살아갈 수 있을까 생각하니 그야말로 가슴에 납 덩어리가 가득 찬 마냥 답답한 슬픔에 잠겨 있었습니다.

그래도 어찌어찌 우리 동포 거주자가 많은 쓰루하시, 이곳은 환상선이라고 당시는 성동선이라 불린 시대였는데 쓰루시마라면 데려가 주겠다고 한 아저씨들이 있어서 그걸 기대했어요. 지금으로 말하면 마이코의 바닷가라는 것을 알게 되었습니다. 그곳에 도착하자마자 모두 거미줄처럼 흩어졌어요. 이제 바닷가에서 무릎을 싸안고 완전히 혼자가 되었어요. 인간이 그렇게 눈물이 많은지, 이미 눈물조차 말라버렸을 텐데 말이지. 무릎까지 바닷물이 차올랐어요. 배가 방향을 바꿔 퐁퐁하면서 가고 나니까 정말로 눈물이 쏟아졌어요. 어떻게 하면 좋을 지 몰랐으니까요. 일어나 본들 이제 어디로 가면 좋을 지 몰라요. 오사카가 어디에 있는 지도 몰랐으니까요. 통치라는 것은 잔혹해요.

클레멘타인 노래는 지금도 그대로 부를 수 있고 뭔가를 하고 있을 때는 콧노래로 부릅니다. 다만 나이가 들어 목소리가 갈라지고 말았어요.

한국의 민주화 요구투쟁은 30년 가까이 이어집니다만 한국의 민주화 요구투쟁의 계기는 일본과의 한일 조약이 맺어지는 것에 반대한 것이었습니다. 그 민주화 요구투쟁 중에 불렀던 노래가 좋았습니다. 예를 들어 잘 알려진 노래 중에 ‘아침이슬’이라는 ‘朝露’라는 노래가 있는데 그런 류의 노래가 좋아요. 그리고 우리나라의 가곡이 정말 놀라웠는데 우리나라에 이런 문화가 있는지 생각지도 못했어요. 전후의 가요라 하면 처음 들었던 ‘내 마음’이라는 노래를 불렀던 전문 소프라노 가수의 여성이 있었는데 그 노래를 듣고는 정말 온몸이 녹아버리는 듯한 씻기는 듯한 느낌에 휩싸였어요. 그래서 우리나라의 가곡을 좋아하고 그것은 전후에 알게 된 노래들입니다. 지금도 흥얼거릴 때면 민주화 요청투쟁 중에 불린 노래를 좋아해요. 그리고 여기에서는 노래에 얽힌 이야기를 할게요.

‘내 마음’, ‘마음’이라고 하면 마음, ‘내’ 라고 하면 나, 그래서 ‘나의 마음’이라는 의미예요. 가사가 좋아요. ‘내 마음은 호수요, 그대 저어 오오. 나는 그대의 흰 그림자를 안고 옥같이. 그대의 뱃전에 부서지리라’ 라는 것이 가장 첫 구절에 나오는 가사예요.
오늘은 목이 그다지 시원찮아서, 아니다 싶으면 다시 녹음해요...

저는 노래에 대해서는 시를 쓰는 사람으로서 언제나 경계하고 있어요. 왜냐하면 일반적으로 불리는 노래는 정말로 죄가 많아요. 저는 호적 상으로는 음력으로 호적이 올라가 있어서 1928년 12월 8일 생입니다. 그래서 일본제국주의의 식민지 통치가 대부분 제도적으로도 생활적으로도 널리 퍼진 시기에 태어났습니다. 저는 일본제국주의의 물리적인 처사를 받지는 않았습나다. 저에게 닥쳐온 (일본의 식민지) 것은 일본의 상냥한 노래로 다가온 것입니다. 지금도 자주 불러요. 일본의 서정가라 불리는 것, 창가라 불리는 것, 거의 모르는 노래는 없을 정도로 저는 잘 알고 있습니다. 자주 부르는 곡입니다. 그래서 아이들이 널리 부르고 있는 ‘유야케 코야케’ 라는 노래 하나만 보더라도 말이지. 그 노래의 가사에 나타나는 풍경이 우리나라에는 없어요. 농촌에 가도 바람불면 날아가 버릴 것 같은 얇은 딱지같은 초가지붕에다 모두 매한가지로 문은 기울어 있고 말이지. 그곳에서 그 ‘유야케 코야케’ 같은 아름다운 곡을 만나게 되면 일본의 수호신을 모신 숲을 떠올리며 불렀던 거예요. 그래서 빨리 우리나라도 그런 아름다운 노래의 나라가 되었으면 했어요. 그 때문에 어서 일본인이 되어야만 한다고 언제나 자기 자신을 몰아세웠던 거예요. 그래서 죄가 많습니다. 요즘 쇼와는 빛났다고 하면서 그 시대를 찬양하는 일본의 서정가가 오늘날 일본 미디어에서 특히 텔레비전에서 꽤나 시간을 들여 얼마나 아름다운 노래인지 즐곤 소개하고 있어요. 저는 일본의 국가적 사회적 정치적 상황에 매우 불안을 느끼고 있습니다. 노래라는 것은 그 살결을 기르는 것이 아닙니다. 감각의 공감을 넓히는 것입니다. 노래에 익숙해지면 그 노래는 어딘가 기억에 남고 다른 것은 있어도 노래는 좀처럼 잊혀지지 않아서 노래를 부르기 시작하면 그 노래가 불린 시대가 가장 좋은 시대였던 것처럼 여기게 돼요. 일본에서도 전후에는 식량난으로 힘들었지만 그래도 그 당시의 노래를 들으면 아주 이쁠러 그 뻤 좋았지 하고 생각하게 돼요. 그래서 노래는 살결이 없기 때문에 시를 쓰는 사람으로서 아주 경계하고 있어요. 제 스타일로 말하자면 노래는 죄가 많다는 것입니다. 일본의 소학창가에서 볼 수 있는 유명한 동요, ‘와라베 우타’ (동요라는 뜻)는 다이쇼 시대 말기, 즉 1930년대 초반에 가장 유행하게 됩니다. 만주사변이라 불리는 만주침공이 그 후 일본의 태평양 전쟁이라는 15년 전쟁의 시작이었는데 그 시기 일본에서는 동요운동이 일어났어요. 일본의 시인은 모두 동요를 쓰게 됩니다. 대부분 지금도 남아있고 지금도 불러집니다. 왜 죄가 많냐 하면 일본의 군인들도 전쟁이 이어지는 중에는 고향의 처자식을 생각하며 그런 노래를 불렀어요. 저도 연령으로 따지면 그런 군인들을 많이 알고 있지만, 그런 아름다운 노래를 부르면서 자신의 가족이나 고향을 그리워 하는데 그 노래를 부르면서 ‘삼광작전’이라고 하는 모두 죽이고 불태우고 약탈하는 인간에게 있을 수 없는 것에 대한 아픔이 전혀 없어요. 그 노래를 부르면서 그런 것들을 저지를 수 있는 거예요. 그래서 일본의 노래를 아름답다고 말하는 거예요. 그러니까 서정가라 불리는 노래, 창가라는 노래는 그 수로 말하면 세계적으로 봐도 톱클래스일 거예요. 결국 그런 노래를 부르면서 고향과 가족은 그리워해도 자신들이 비열한 것을 저지르는 것에 대해서는 아픔을 하나도 느끼지 못한 것이 일본의 서정가라는 노래인 거예요. 저는 지금도 그 노래를 불러요. 제가 부르는 이유는 그 노래를 부를 수 없는 사람들의

<div><div></div> Borom</div>

죽음을 반추하기 위함입니다. 어쨌든 그 정도로 아름다운 노래가 아름다운 노래가 되기 위해서는 그 노래가 더럽혀지는 것을, 해서는 안되는 것을 하지 않으면 안되는 것이죠. 게다가 노래는 시간과 장소에 따라 노래의 생명을 달리 합니다. 지금 오키나와에서는 해노코 기지에 반대하기 위해 노년층들이 3000일 동안이나 연좌 데모를 하고 있어요. 그 사람들이 ‘고주 잠자리’를 부를 때 또는 ‘고향’을 부를 때는 노래의 생명이 달라요. 그렇기 때문에 노래는 살결이 없어요. 정감을 공감하는 것으로 바로 하나가 되죠. 특히 일본인과 같은 국민성은 하나로 무리 짓는 것에 뛰어나기 때문에 노래의 힘은 정말로 큼니다. 저의 스승님이라고 저 혼자 생각하고 있는 선생님의 말 중에 ‘노래없이 부흥청은 시작되지 않는다’라는 말이 있는데 그야말로 노래는 그런 역할을 지금 맡고 있어요. 그래서 저는 시를 쓰는 사람으로서 노래를 중요하게 생각하고 그 노래의 좋은 점을 이어가는 사람들이 부르는 노래가 아름다운 것이라 생각해요. 좋은 노래이기 때문에 부른다고 해도 헌법 9조를 없애는 것에 대해 아무런 고민도 없이 찬성하거나 계속해서 아베 수상은 인기가 높을 뿐이에요. 그런 사람들의 대부분이 일본의 서정적인 노래를 좋아합니다. 그래서 노래에 대해서는 언제나 경계심을 갖고 있습니다. 이상입니다.

*김시중
1929년 12월 8일 부산 출생. 아버지 김찬국, 어머니 김연춘 사이의 외아들로 태어나 어린 시절 함경남도 원산에서 할아버지와 지냄. 그 후 제주도에서 자라나 제주 4·3사건에 연루됨을 계기로 일본으로 밀항(1949년). 1950년 경부터 일본어로 시를 쓰기 시작. 재일조선인 단체의 문화활동에 관여하지만 운동의 노선전환 이후 조직적 비판을 받아 조직운동을 떠남. 효고현립 미나토가와 고등학교 교원(1973~92년). 오사카 문학학교 특별 교문. 시인. 주요 작품으로 시집 『지평선』(1955), 『일본풍토기』(1957), 장편시집 『나이가타』(1970), 『원야의 시』(1991), 『화석의 여름』(1998), 『경계의 시』(2005), 『잃어버린 계절』(2010) 등. 평론집 『클레멘타인의 노래』(1980), 『자이니치의 틈새에서』(1986) 등. 수필 『풀숲의 시』(1997), 『나의 생과 시』(2004), 『조선과 일본에서 살다』(2015) 등 다수. (작가 약력은 후지와라 서점 웹사이트에서 발췌)

<div><div></div> Borom</div>

죽음을 반추하기 위함입니다. 어쨌든 그 정도로 아름다운 노래가 아름다운 노래가 되기 위해서는 그 노래가 더럽혀지는 것을, 해서는 안되는 것을 하지 않으면 안되는 것이죠. 게다가 노래는 시간과 장소에 따라 노래의 생명을 달리 합니다. 지금 오키나와에서는 해노코 기지에 반대하기 위해 노년층들이 3000일 동안이나 연좌 데모를 하고 있어요. 그 사람들이 ‘고주 잠자리’를 부를 때 또는 ‘고향’을 부를 때는 노래의 생명이 달라요. 그렇기 때문에 노래는 살결이 없어요. 정감을 공감하는 것으로 바로 하나가 되죠. 특히 일본인과 같은 국민성은 하나로 무리 짓는 것에 뛰어나기 때문에 노래의 힘은 정말로 큼니다. 저의 스승님이라고 저 혼자 생각하고 있는 선생님의 말 중에 ‘노래없이 부흥청은 시작되지 않는다’라는 말이 있는데 그야말로 노래는 그런 역할을 지금 맡고 있어요. 그래서 저는 시를 쓰는 사람으로서 노래를 중요하게 생각하고 그 노래의 좋은 점을 이어가는 사람들이 부르는 노래가 아름다운 것이라 생각해요. 좋은 노래이기 때문에 부른다고 해도 헌법 9조를 없애는 것에 대해 아무런 고민도 없이 찬성하거나 계속해서 아베 수상은 인기가 높을 뿐이에요. 그런 사람들의 대부분이 일본의 서정적인 노래를 좋아합니다. 그래서 노래에 대해서는 언제나 경계심을 갖고 있습니다. 이상입니다.

1장 : 바람

<div><div></div> Borom</div>

바람에 대한 기록들은 다음의 장소에서 수집하였다.

- 알뜨르 비행장 : 제주특별자치도 서귀포시 대정읍 상모리 1629-8**

The Altteuleu airfield: 1629-8, Sangmo-ri, Daejeong-eup, Seogwipo-si, Jeju-do
- 천주교 신창성당 용수공소 : 제주특별자치도 제주시 한경면 용수길 149-9**

Catholic Church Sinchang Cathedral Yongsu station: 149-9, Yongsu-gil, Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 성굴 (도구리할망 굴) : 제주특별자치도 제주시 한경면 성굴로**

Seonggul (Doguri Halmang Gul): Seonggul-ro, Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 도두 알작지 (도두항) : 제주특별자치도 제주시 도두항길22-2**

Dodu Aljakji beach (Dodu Port): 22-2, Doduhang-gil, Jeju-si, Jeju-do
- 당산봉 (생이기정- 새의절벽) : 제주특별자치도 제주시 한경면 용수리 산59**

Dangsanbong (Saengi-gijeong = Bird's cliff): 59 Yongsu-ri, Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do, South Korea
- 수월봉 (용암지층, 태풍) : 제주시 한경면**

Suwolbong (Lava strata, Typhoon): Hangyeong-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 제주시 공설공원 묘지 : 제주특별자치도 제주시 연동**

Jeju City Public Park Cemetery: Yeon-dong, Jeju-si, Jeju-do
- 제주 관음사 세불선원 : 제주특별자치도 제주시 산록북로 690-1**

Jeju Gwaneumsa Sebul Zen temple: 690-1, Sallokbuk-ro, Jeju-si, Jeju-do
- 상가리 굴 과수원 (새, 바람) : 제주특별자치도 제주시 애월읍 상가북2길 19**

Sangga-ri Tangerine orchard (Bird, Wind): 19, Sanggabuk2-gil, Aewol-eup, Jeju-si, Jeju-do

<div><div></div> Borom</div>

죽음을 반추하기 위함입니다. 어쨌든 그 정도로 아름다운 노래가 아름다운 노래가 되기 위해서는 그 노래가 더럽혀지는 것을, 해서는 안되는 것을 하지 않으면 안되는 것이죠. 게다가 노래는 시간과 장소에 따라 노래의 생명을 달리 합니다. 지금 오키나와에서는 해노코 기지에 반대하기 위해 노년층들이 3000일 동안이나 연좌 데모를 하고 있어요. 그 사람들이 ‘고주 잠자리’를 부를 때 또는 ‘고향’을 부를 때는 노래의 생명이 달라요. 그렇기 때문에 노래는 살결이 없어요. 정감을 공감하는 것으로 바로 하나가 되죠. 특히 일본인과 같은 국민성은 하나로 무리 짓는 것에 뛰어나기 때문에 노래의 힘은 정말로 큼니다. 저의 스승님이라고 저 혼자 생각하고 있는 선생님의 말 중에 ‘노래없이 부흥청은 시작되지 않는다’라는 말이 있는데 그야말로 노래는 그런 역할을 지금 맡고 있어요. 그래서 저는 시를 쓰는 사람으로서 노래를 중요하게 생각하고 그 노래의 좋은 점을 이어가는 사람들이 부르는 노래가 아름다운 것이라 생각해요. 좋은 노래이기 때문에 부른다고 해도 헌법 9조를 없애는 것에 대해 아무런 고민도 없이 찬성하거나 계속해서 아베 수상은 인기가 높을 뿐이에요. 그런 사람들의 대부분이 일본의 서정적인 노래를 좋아합니다. 그래서 노래에 대해서는 언제나 경계심을 갖고 있습니다. 이상입니다.

- 4.3학살터 (사라진 마을) : 제주특별자치도 서귀포시 안덕면 동광리 233**

4.3 Slaughter ground (Lost town): 233, Donggwang-ri, Andeok-myeon, Seogwipo-si, Jeju-do
- 사라봉 (영등굿) : 제주특별자치도 제주시 건입동 사라봉동길 74**

Sarabong (Yeongdeung-gut): 74, Sarabongdong-gil, Jeju-si, Jeju-do
- 우도검멀레해변 - 경안동굴 (해안동굴) : 제주특별자치도 제주시 우도면 우도해안길**

Udo Geommeolle Beach - Gyeongan Cave (Coastal cave): Udohaean-gil, Udo-myeon, Jeju-si, Jeju-do
- 교래자연휴양림 (꽃자왈) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 남조로 2023**

Gyoraе Natural Recreation Forest (Gotjawal Forest): 2023, Namjo-ro, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 용담 다끄내포구 : 제주특별자치도 제주시 용담2동 1092-7**

Yongdam Dageune Port: 1092-7 Yongdam 2-dong, Jeju-si, Jeju-do
- 하도 - 종달 올레길 (돌담, 바람) : 제주특별자치도 제주시 구좌읍 해너박물관길 26**

Hado - Jongdal Olle Trail (Stone wall, Wind): 26, Haenyeobangmulwan-gil, Gujwa-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 하도 (철새도래지) : 제주특별자치도 제주시 구좌읍 하도리 53-2**

Hado (Habitat for Migrant Birds): 53-2, Hado-ri, Gujwa-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 하에포구 (밤바다) : 제주특별자치도 서귀포시 하에동 1729-1**

Haye Port (Night sea): 1729-1, Haye-dong, Seogwipo-si, Jeju-do
- 함덕해수욕장 (마을) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 신북로**

Hamdeok Beach (village): Sinbuk-ro, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 북촌포구 (4.3학살터) : 제주특별자치도 제주시 조천읍 북촌9길 26-1**

Bukchon Port (4.3 Slaughter ground): 26-1, Bukchon 9-gil, Jocheon-eup, Jeju-si, Jeju-do
- 관탈섬 (괭계) : 제주 북 27km (좌표 : 동해 33° 43′50.8″N 126° 21′22.6″E)**

Guantal Island (Gwagge): 27 kilometers north of Jeju City (coordinate point: east sea 33°43′50.8″N 126°21′22.6″E)

2장 : 현무암

<div><div></div> Borom</div>

현무암은 용암의 급속한 냉각으로 형성된 어두운 색의 미세한 입자의 화성암이다. 대개 기포에 의해 형성된 구멍을 포함하고 있다.

<div><div></div> Borom</div>

본 책자의 뒷 표지에 있는 제주도의 지도를 참조하시기 바랍니다.

3장 : 와르다 레스토랑의 업서

<div><div></div> Borom</div>

낭독 : 칼리드 아다
“저는 이 마을에 사는 팔레스타인 난민입니다. 그래서 당신이 이곳에서 외국인으로서 겪는 어려움을 이해합니다. 예멘에서 전쟁이 끝나고 전 세계 난민들을 환영하는 번영하는 나라가 되기를 바랍니다. 또한 모든 국가가 난민에게 문을 열고 전 세계에서 전쟁이 끝나기를 희망합니다.” - 샤디

4장 : 영등할망

오용부 심방의 영등할망(바람의 여신)을 보내는 송별대제
광치기 해변, 2020년 3월 9일

5장 : 노래

다음의 플레이 리스트는 한국에 사는 에멘인으로 구성된 ‘희망의 학교’ 회원이 보내준 것이다. 희망의 학교는 제주도에서 설립되어 제주도민들과 한국에 새롭게 망명해 들어온 에멘인들이 함께 모여 지원 커뮤니티 구축을 목표로 활동하고 있다.

1.Chanyeol (EXO) & Punch - Stay With Me
2.LYn - The Legend of the Blue Sea
3.Younha - I Believe
4.Adham Nabulsi - Hada Ma Byentasa
5.Rahma Riad - Mako Menni
6.Aseel Hameem - Enta Al Saadah
7.Faia Younan - Ohebbou Yadayka
8.XXXTENTACION - changes
9.Adele - Someone Like You
10.Rihanna - Love The Way You Lie
11.Abeer Nehme - Waynak
12.Ramy Gamal - Sa'af
13.Rihanna - Diamonds
14.Qomery Molatham - Hadeel
15.Best Songs Of Justin Bieber - Justin Bieber Greatest Hits Cover 2017
16.Clean Bandit – Rockabye

6장 : 클레멘타인, 내 마음 & 아침이슬

황금녀 (제주어로 인터뷰) :

제주도는 아주 살기 좋고 인심좋은 고장이었거든. 매일 만나는 사람끼리도 인사말이 밥먹읍서로 시작하던 게 제주도예요. 그 때 사람들은 마음이 넉넉한 사람들이었어요. 이 4,3 사태가 나면서 엄청난 충격에 말한마디 못하는 반병어리로 살아왔어요.

제주가 바다 가운데 솟은 섬이기 때문에 바람들이 어디 의지할 데가 없어요. 그리고 바람 이름도 30여가지가 더 돼요. 그 수를 다 쓸 수는 없어요. 연은 이제 우리가 여자애들이니까 남자애들이 언날릴 때 막 쫓아다녔어요.

어릴 적 제주의 공기는 늘 바다 내음이 섞여 있었어요. 바닷내음이 늘 공기에 섞여 있고 촉촉한 느낌이에요. 제주의 바람은 봄이면 쭉내음, 여름이면 풀내음, 가을에는 들국내음, 겨울에는 훈풍이 불어서 너무 좋은 거예요.

제주 돌들은 화산 활동에 의해서 돌들이 형성된거죠. 그래서 주로 현무암으로 되었기 때문에 물이 흡수가 잘 되요. 그래서 제주에서는 논농사 보다는 밭농사를 더 많이 했어요. 돌담이 자연경관과 잘 어우러진 것을 보면 그 풍광이 아주 귀한 보물이에요. 옛날 조상들은 이 담 구멍들을 숨구멍, 숨쉬는 구멍이라 불렀어요.

그 돌담 구멍에서 옆집에 제삿날 같은 날은 맛있는 음식 냄새가 막 들어오기 때문에 그 구멍에 얼굴을 대고 냄새도 맡고 옆집에 음식하는 것도 보면서, 우리 할머니가 오일장에 가셨나 하고 들여다보고, 젊은이들은 올레담으로 가다 오다 눈을 마주치거든. 그래서 결국은 결혼을 하게 되는 사연이 많아요.

보름이야긴데 우리 고단엔 보름도 한난있जू

바담 가운데 솟아난 섬이난

삼서방에서 불어오는 보름들

의지할디가 없시난 한락산만 찌엉돌고

보름 이름도 실라믄 가지가 더 든 된건나
여영은 보름 부는 데서 살테느난
해에 구름 찌는거나 돌에 가씨는거나 산에 구름 찌는 걸 절기에 맞추영 잘 조절하멍 살아온 거जू

먼저 보름부는 방위부터 말하자며는에
셋보름은 셋보름에 하니보름에 마포름에 높보름이जू
셋보름은 동풍이고 하니보름은 북풍이고 마포름은 남풍이고 높보름은 동북풍이여

서순실 심방 (발췌) :
영등할망신이 올 때는 다 조심해야 돼. 옛날 사람들은 이불에 풀을 안하고 통쇠에 거름도 안해. 그만큼 조용하게 지내다가 영등할망이 지나가고 따뜻한 바람이 들어오면 다시 일을 시작해.

제주도의 아픔을 알리는데 한 몫을 한 김시중 선생님. 티비에 나오시는 것을 계속 봤었고 대마도에 갔을 때 선생님을 봤어요. 선생님이 건강해 보여서 좋았고 제주도를 잊지 않고 관심을 가져주셔서 감사합니다.

노래 및 연주 : 김시중, 정신지
넓고 넓은 바닷가에

넓고 넓은 바닷가에
오막살이 집 한채
고기 잡는 아버지와
철 모르는 딸 있네

내 사랑아 내 사랑아
나의 사랑 클레멘타인
늙은 아비 혼자 두고
영영 어딜 갔느냐

내 마음

작사 : 김동명
작곡 : 김동진

내 마음은 호수요
그대 저어 오오
나는 그대의 흰 그림자를 안고
옥같이 그대의 뱃전에 부서지리다

내 마음은 촛불이요
그대 저 문을 닫아 주오
나는 그대의 비단 옷자락에 떨어
고요히 최후의 한 방울도
남김없이 타오리다

내 마음은 나그네요
그대 피리를 불어 주오
나는 달 아래 귀를 기울이며
호젓이 나의 밤을 새이오리다

내 마음은 낙엽이요
잠깐 그대의 뜰에 머무르게 하오
이제 바람이 불면
나는 또 나그네같이
외로이 그대를 떠나가리다

아침이슬

작사·작곡 : 김민기

긴 밤 지새우고 풀잎마다 맺힌
진주보다 더 고운 아침 이슬처럼
내 맘에 설움이 알알이 맺힐 때
아침 동산에 올라 작은 미소를 배운다

태양은 묘지 위에 붉게 떠오르고
한낮에 찌는 더위는 나의 시련일지라
나 이제 가노라 저 거친 광야에
서러움 모두 버리고 나 이제 가노라

내 맘에 설움이 알알이 맺힐 때
아침 동산에 올라 작은 미소를 배운다

태양은 묘지 위에 붉게 떠오르고
한낮에 찌는 더위는 나의 시련일지라
나 이제 가노라 저 거친 광야에
서러움 모두 버리고 나 이제 가노라

특별 인터뷰 & 목소리 출연:

김시중
(왕홍카이 인터뷰, 강신자와 류린유 진행)

음원 녹음, 디자인 & 믹싱:
강경덕(웬프스튜디오)

제작 코디네이터:
권상해

출연:
황금너, 정신자, 칼리드 아다, 서순실

영등굿:
오용부

5장 플레이 리스트:
희망의 학교 회원

번역:
김화연(한국어-영어), 권상해(일본어-한국어), 폴라 페런(아랍어-영어),
잔무주(일본어-중국어), 스미토모 후미히코, 이가라시 준(영어-일본어)
김시중 인터뷰 전사: 치바 하나코

교정:
김화연, 권상해, 스미토모 후미히코

리서치 보조:
정사오리

책자 편집:
권상해

디자인:
테라사와 요시키

도움주신 분들:
백가운, 빌 디즈, 에밀리 왕, 한진오, 홍이지, 희망의 학교, 호추니엔,
강신자, 스가 케이지로, 김인선, 김성내, 고완순, 이도희, 이준하, 류린유,
커니안푸, 박은혜, 와르다 레스토랑, 쟈인주, 용수미

제작 위탁:
아즈 마에바시, <듣다 - 증명하는 세계>전
(2020년 12월 12일 - 2021년 3월 21일)

후원:
대만국립문화예술기금회, 제주비엔날레

협력:
도쿄예술대학 대학원 국제예술창조연구과

